
次元の破壊者～繋がる世界の絆～

亀鳥虎龍

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

次元の破壊者〜繋がる世界の絆〜

【Nコード】

N9297T

【作者名】

亀鳥虎龍

【あらすじ】

『次元の破壊者』と呼ばれる男に、様々な平行世界が破壊されてしまった。

次元を渡る事を許された巫女・閃可は、幼馴染の真之介と共に選ばれし者達と共に、その野望を阻止するために立ち向かう。

『重要大事』さんの許可を貰い、『次元の破壊者』をアレンジしました。

是非呼んでください。

9月30日にタイトルを変えました。

第一話・プロローグ（前書き）

序章です。

第一話：プロローグ

「とうとう、この世界も終わりか……」

私はそう呟きながら奴に破壊された『世界』をただ見守る事しか出来なかった。

「父ちゃん……俺……どうすれば良いんだよ？」

私の友達の真之助をそう言って俯く。

「でも……まだ希望はある！」

そう思いながら私は、鏡に映る七つの世界を見る。

「彼等なら……きっと！」

「じゃあ、俺はこの世界に。」

「気を付けて。」

そして私達は時空を越え、助けを求めた。

僅かな希望に……

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（前書き）

最初のメインメンバー登場！

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵

「イテテテ……あれ……ココ何処だ？」

右手に幻想を殺す力を宿す少年・上条当麻がそう言った。

辺りは真っ暗と言うより、闇に包まれている。

「とーまー！」

そんな彼のもとへ、『禁書目録』と呼ばれる白い修道服の銀髪シスター・インデックスが駆け寄る。

「インデックス。もしかしてコレって、魔術絡みか!？」

「それが、分からないんだよ。」

「……インデックスでも分からない現象だつて言つのかよ!？」

動揺する上条であったが、突如声が聞こえた。

「何だア……手当たり次第歩き回つたら、何でオマエに会うんだア？」

「すっごい再会！ つてミサカはミサカは驚いたり!！」

「ミサカも、ちょっと驚き」

『学園都市』最強のレベル5・一方通行アクセアレータと外見年齢十歳前後の少女・

打ち止め（ラストオーダー）、そして彼女を高校生くらいの体格にした少女・番外固体ミサカワーストが現れる。

「一方通行に打ち止め、それに・・・番外固体だったな！ お前等、どうして!？」

「どオしたも、こオしたも・・・目が覚めたらココにいたんだよ。」

「これには本当に驚いたってミサカはミサカはビックリする。」

そして今度は、今度はジャージを来た少年が現れる。

「オイオイ、コリヤどういうことだ!？」

「はまづら、少し落ち着いて。」

『アイテム』の構成員・浜面仕上とその恋人の滝壺理后が登場。

「全体が真っ暗だもんだから、色々歩いて見たら、顔見知りに出っ
ちまったよ。」

「どつやら俺達、謎の空間に着ちまったみてえだな。」

すると、上条に向かって閃光が走ってきた。

「うおおおおおおお!？」

すぐに右手を構えてその閃光を打ち消す上条。

「何すんだよビリビリ!」

「やっぱりアンタだったのねってビリビリ言うな!」

さらには『常盤台の超電磁砲』^{レベルガン}の異名を持つレベル5の能力者の第
三位・御坂美琴、

「全く、キミとこんな形で再会するとは……」

「お久しぶりです、上条当麻。」

魔術教会『必要悪の教会』^{ネセサリウス}の魔術師・ステイル^{II}マグヌスと神裂火
織、

「お久しぶりです!」

天草式十字凄教の魔術師・五和、そして

「いよう、カミヤンに一方通行、久しぶり」

陰陽術師の家系の能力者にして、上条のクラスメイト・土御門元春
がいた。

「土御門。」

「ん?」

因みに土御門は、突如上条&一方通行に、

「オラア!」

「ガフン！」

顔面ヒットされた。

「な……何するんだにやー？」

「いや、何となくムカついた。」

息びつたりの二人であった。

そんな上条達の前に五人の人物が現れる。

「オイオイ、こりやどうなってんだ!？」

霊界探偵・浦飯幽助が上条達の下へ現れる。

「多分、彼等も同じ考えでしょうね。」

赤い髪的青年・蔵馬がそう言い、

「霊力とは違う変わった気があの四人に感じるんだが……」

幽助の同級生・桑原和真がステイル、神裂、五和、土御門を見てそう言った。

「それにしても、ココ真つ暗なのに周りはハッキリ見えるね。」

霊界案内人・ぼたんがそう言った。

「……………」

黒いコートを着た小柄な男・飛影は沈黙していた。

「なあ、お前等もこの状況に驚いてるのか？」

「え……あ、ああ……………」

幽助に問われた上条は戸惑いながらも素直に答える。

「何か、大変だな……………」

「ああ、全くだぜ。」

桑原と浜面は、いつの間にか意気投合し、

「……………何だア、テメエ？」

「……………フン、別に。」

一方通行と飛影は、親近憎悪と言っべきか、今にも喧嘩上等という

秀囲気であつた。

「やれやれ、誰かムードメーカーと呼ぶべき人物はいないんでしょ
うか？」

溜め息混じりに苦笑する蔵馬に神裂は、

「大変ですね。」

少し、同情する。

いつの間にか親睦を深めた彼等であつたが、

「「「「「！」「」「」

浦飯チームの四人は、突然何かを察知した。

「コイツは！」

「妖気!?!」

「バカな、どれもS級以上だぞ！」

「しかも凄い数だぜ！！」

四人は戦闘態勢に入って構えるが、すぐに解かれる事になった。

「あれ、やっぱり誰かいる。」

今度は中学生くらいの着物を着た茶髪の少年を先頭に九人の集団が現れた。

それは関東妖怪任侠一家『奴良組』若頭・奴良リクオとその仲間達、そして陰陽師の花開院ゆらであった。

「若、どうしやす？」

「とりあえず、話しをしてみないと……」

「奴良くん、それホンマにするつもりか？」

そんな彼等の会話を聞いて蔵馬は、

「どうやら、彼等も同じ状況みたいですね。」

そんなこんなで、話しをする事になった彼等であった。

数分後、互いの状況を聞いた三組は、すぐに打ち解けた。

「つまり、ゆらだっけ？ オメエは、『鵠』って妖怪を倒すために、リクオ達と共闘してるってことか？」

「妖怪と手え組むのはしゃーないけど、これも人々を守るためや。

てかアンタ陰陽師で驚かんのか!？」

「いや別に？」

ゆらは、陰陽師の自分に驚かない幽助に逆に驚く。

「俺は土御門が陰陽師って聞いた時は内心信じられなかったけど、ゆらなら納得がいく。」

「確かにな。」

上条と一方通行は、ゆらと土御門を見比べそう言った。

「ちょっと、それは俺がゆらちゃん比べて、陰陽師ばくないって言ってるのと同じじゃん!？」

「当たり前だろオ？」

「だってそうだろう?？」

そんな会話をしながら歩いていると、リクオが何かを見つける。

第二話：幻想殺しと任侠一家と霊界探偵（後書き）

更なるメンバーが次回に！

第三話・銀髪の子と謎の女（前書き）

遂にあの人が登場

第三話：銀髪 of 侍と謎 of 女

空間の中を歩いていると、リクオが何かを見つけた。

「ねえ、あれって……」

『ん？』

そこには、銀髪 of 天然パーマ of 男、眼鏡を掛けた少年、チャイナ服 of 少女、同じ黒い制服を着た三人 of 男 of 六人が寝ていた。

「……………」

どうしようかと思ったが、とりあえず起こしてみる。

「おい、起きろ。」

幽助がそう言つと、

「誰だ、変な目覚まし掛けた奴。」

「今八時だろうが！ 少しくらい寝かせるバカヤロー！」

「銀さんも神楽ちゃんも五月蠅い。」

寝言で返事する三人。

と言つ事なので、

「「「起きろ!」「」」

幽助が銀髪を、一方通行が眼鏡を、飛影がチャイナ服を踏み付けた。

「「「んが!?!」「」」

踏まれてすぐに起きた。

「テンメ! 何しやがんだ!」

「そうアルよ! 折角のお昼寝の邪魔は許せないアルね!」

「そうですよ! 睡眠妨害で訴えますよ!」

「つーか、周りを確認してから寝てたのか?」

「「「へ?」「」」

幽助にそう言われた三人は、周りを見渡すと、

「あ、ホントだ。」

「真っ暗アル。新八、電気何処アルか?」

「いや、どう見てもそう言う状況じゃないでしょ!?!? てか何時まで我が家気分!?!?」

「.....気付いてなかったのかよ?」

すると、今度は黒服の三人も起きた。

銀時にそう言われた少女は、こう言った。

「貴方達を呼んだものよ？」

「マジで!？」

「マジで。」

さてと、と言って少女は自己紹介をする。

「私の名は閃可^{せんか}。貴方達に頼みがあつてココに呼んだの。」

そう言うと、閃可は腰の刀を抜く。

「まずは、腕試しよ。上条当麻、浦飯幽助、奴良リクオ、坂田銀時!」

「来る!」

「構えとけよ!」

「わーってるわ、ボケ!」

「うん!」

閃可は右手から火球を放つも、

「効くかよこんなモン!」

上条が右手で打ち消した。

それを見た能力者&魔術師メンバー以外は驚きを隠せなかった。

「打ち消した!?!」

「弾くのではなく、打ち消すって!?!」

「何だあの能力!?!」

それを見た閃可は、

「流石は『幻想殺し(イマジンプレイカー)』!」

そのままリクオに刃を向ける。

「少年、受け取れ!」

近藤から刀を受け取ったリクオ。

「ハア!」

振り下ろされると同時に、リクオに変化が起きた。

ガキイイイン、と刀と刀がぶつかり合う。

しかし、一同が驚いているのは、

「良い腕だな。」

「クッ！」

すぐに霊丸を紙一重でかわす閃可。

浦飯チームのメンバー以外は驚きを隠せなかった。

「な……何だ、アリヤ!?」

「妖気だけでこれほどの威力が出せるなんて!？」

「ハア……ハア……流石は霊丸……凄いい威力ね。」

「まあな。」

すると、閃可は刀を納めた。

「突然攻撃してゴメンナサイ。貴方達の力を知りたかったから。」

「で、そこまでやる理由は何だ？」

その問いに閃可はこう言った。

「私が『次元の破壊者』と呼んでいる人物を倒して欲しいの。」

「次元の……破壊者？」

「ええ。」

リクオの発言に閃可は頷く。

「彼は、私の幼馴染の親友で……と言っても私と幼馴染はまだ六歳で、その親友は十八歳だけど。」

「……随分、齡の離れた親友ですね。」

説明を聞いた神裂は、少し驚く。

「彼は、当時結婚を控えていたの。でも、彼の婚約者の女性が暴力団の起こした交通事故に遭い、帰らぬ人となった。」

「……とても穏やかな話しじゃねエな。」

一歩通行は呟きながらそう言った。

「そして彼は、その悲しみと憎しみが暴走し、幾つもの異世界を破壊しようとしてるのよ。」

「ソイツが『次元の破壊者』ってことか？」

「……ええ。」

閃可はさらに話しを続けた。

「そして、私は彼に対抗するべく、幼馴染と共に選ばれた異世界の住人に協力をして欲しいと考えたの。」

「それが、俺達ってことか？」

「そう言う事よ。」

「しかし、何故そこまでして彼は異世界を壊そうと？」

蔵馬の質問に閃可はこう言った。

「世界には、必ず『理』という物が存在するの。」

「まさか、ソイツの目的って!？」

「そう……死んだ婚約者を生き返らせる『理』を得るためよ。」

その言葉で、全員が驚愕した。

全ての話しを終えた閃可は、頭を下げた。

「お願い！ これ以上、世界を壊されたくないの！ 力を貸して！
！」

それを聞いた上条は、

「頭、上げるよ。」

「え……………」

「俺達と呼ばれた理由が分かった。だったら、ソイツの幻想をブチ殺してやるよ！」

右手の拳を握りながらそう言った。

「面白え、やってやるうじやねえか。ソイツのイカしたツラあ、ぶっ飛ばしてやるよ。」

幽助がそう言って右手の拳を左手の掌にぶつける。

「俺も、全ての『畏』をぶつけて、完膚なきまでに叩き潰してやるよ。」

リクオがそう言って腕を組む。

「じゃあねえな、やってやるよ。」

そう言って銀時は頭を掻く。

「有難う！ それじゃあ、今から私の幼馴染が呼んだ異世界の住民の代表者について説明するわ。」

第四話・マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界（前書き）

説明が始まります

第四話：マフィアの世界と魔導師の世界と死神の世界

閃可は突如、後ろの背景を大きなスクリーンにして映像を見せる。

「な、何だこりゃ!？」

「七つの地球!？」

驚く幽助と桑原に彼女はこう言った。

「この七つの内、貴方達の住んでいた世界、私はそれをこう呼んでいるの。まず幽助達の世界は『霊界探偵の世界』、リクオ達の世界は『百鬼夜行の世界』、上条達は『科学と魔術の世界』、そして銀さん達は『侍の世界』ってね。」

そう言った閃可は、一つ目の世界の代表者を紹介する。

「まずは、この世界よ。この世界では、並盛町と呼ばれる街に住むこの少年なんだけど……」

するとそこには、重力を無視したようなツンツン頭の少年が必死に走っていた。

「彼の名は沢田綱吉。勉強も運動も全くダメな少年で、通称は『ダメツナ』なんだけど、実は彼は先祖代々から続くマフィア『ボンゴレファミリー』の十代目ボスなの。」

「ま……マフィアって、あの洋画に出てくる麻薬とかを売ってるあのマフィアか!？」

「幽助の言ってることは過剰だけど……彼には、自身の所有し、家庭教師であるアルコバナーレ・リボンが放つ弾丸に使われる丸薬『死ぬ気丸』を使うことで、ハイパー化と呼ばれる姿と化すことが出来るの。その映像がこれ。」

するとそこには、額にオレンジ色の炎を宿したさつきとは別人のツナが映っていた。

「さ……さつきのガキとは思えねえ雰囲気だぜ……。」

「それだけじゃない、グローブの炎の噴出で空を飛んでいる。」

「そんな彼にはこんな技があるのよ。」

閃可がそう言うと、そこにはグローブから発する炎を相手にぶつか
るツナの映像を見て驚愕する。

「この技は、彼の武器『Xグローブ』を使った『X BURNER』
と呼ばれる技で、幽助の霊丸に匹敵する威力よ。」

「マジで！ スゲー！！！」

驚くどころか、ワクワクする幽助に上条達はこう思った。

「（バトルマニアかよ！？）」

またリクオにいたっては、

「（こいつも俺と同じ境遇を持ってることか……）」

自分と同じ境遇を持つツナに共感を持った。

「私はこの世界を『マフィアの世界』と呼んでいるわ。」

次に閃可は、『マフィアの世界』の説明を終えた後、次の世界の説明をする。

「次は、この世界。この世界は『ミッドチルダ』と呼ばれ、魔法が盛んになっていて、銃器などの物理兵器の使用を禁止している。」

「ん？ 魔法って……ステイルや神裂達が使う魔術と違うものなのか？」

上条がそう言うと、閃可はこう答えた。

「まあ、名前だけが違うだけで、殆どが似たようなものかな。因みに私が紹介したいのはこの人物。」

映像には、杖を持って空を飛んでいる白い服に栗色の髪の女性の姿があった。

「さっきのツナって奴みたいに飛んでるぞ！」

驚く桑原であったが、御坂がこんな事を言った。

「魔法に、女性って・・・もしかして『魔法少女』!?!」

それを聞いた銀時はこう言った。

「おいおい、そりゃアニメの観過ぎじゃねえか?」

「いや、彼女は立派な魔法少女よ。」

それを聞いた銀時は古典的なこけ方をしてしまった。

「彼女名は高町なのは、23歳。ミッドチルダにある組織『時空管理局』の武装部隊所属にして、戦技指導官を務める女性で、『エースオブエース』の異名を持つ。因みに怒らせると怖い。」

「スゲーな、んじゃコイツにも必殺技ってあんのか?」

期待する幽助に閃可はコレよ、と映像を見せた。

そこには、砲撃を撃ち込んだなのはの姿だった。

「スゲー! 何だあの技!」

「『デivainバスター』・・・高町なのはの使う杖形デバイス『レイジングハート』のシューティングモードから放たれる技よ。」

「スゲーな! 俺の霊丸とガチで勝負してえ!」

闘争心を昂ぶらせる幽助に、殆どがドン引きし、浦飯チームのメンバーは呆れてしまう。

「私はこの世界を『魔導師の世界』と呼んでいるわ。」

最後に閃可は、『魔導師の世界』の次にある世界の映像を見せた。

「この世界では、異形の姿と化した悪霊『ホロウ虚』から死神が人々を守るために戦っている世界なの。」

「待てエエエエエエエエい！ 死神って、黒いフードに大鎌を持った骸骨の事だろ!?!」

「それは人間のイメージよ。本来死神というのは、死した魂を導く存在なのよ。『黒いフードに大鎌を持った骸骨』っていうのは、人の恐怖心の産物よ。因みにこの世界の死神は、黒衣着物の侍の姿をしているのよ。」

銀時の素朴な問いを一蹴するように答えた閃可は、ある人物の映像を見せる。

そう言うつと閃可は、一護が斬魄刀『新月』から巨大な斬撃を放つ映像を見せる。

「これは一護の必殺技で、名前を『月牙天衝』と呼ぶわ。」

「ホントにスゲエな！早くアイツらに会わせてくれよ！」

期待が高まる幽助に閃可はこう言った。

「それじゃあ、説明も終わったし、今から貴方達に彼等の情報を頭の中に入れておくわ。」

「そんな事、可能なのか？」

「勿論、それじゃあ、目を瞑っというて。」

そう言われ全員は、目を瞑りながら二つの世界の情報を閃可から得たのである。

「しかしスゲエな、アイツ等相当な場数を踏んでやがるよ。」

「それじゃ、これから私の知り合いの世界に行くわよ。」

第五話：部屋分けと模擬戦の対戦カード

四組が着くと、そこには大きな屋敷が立っていた。

「デケエなあ、これオマエの家か閃可？」

「一応は、知り合いから借りてるといえば良いかしら。」

銀時の問いに閃可はサラッと答える。

ドアを開けると、そこには広すぎると言っても可笑しくないリビングがあった。

「かあ、広すぎんぜ！」

「マジかよ、これ俺等が使って良いのかよ!？」

驚く幽助と桑原であるが、

「良いのよ。困った時はお互い様だから。」

閃可はサラッとそう言った。

「それじゃあ、部屋分を行いたいんだけど良いかしら？」

「俺は構わないぜ？」

「俺も眠れるトコなら何処でも良いぞ。」

「俺も構わないけど。」

「僕も同じです。」

「じゃあ、こつしたんだけど。」

閃可は、何処からか持って来たホワイトボードに張られた張り紙を見せる。

そこには、こつ記されていた。

・ルームナンバー1
奴良リクオ

上条当麻

浦飯幽助

坂田銀時

・ルームナンバー2
青田坊

神楽

河童

・ルームナンバー 3

近藤勲

沖田総悟

黒田坊

・ルームナンバー 4
神裂火織

五和

毛倡妓

・ルームナンバー 5

志村新八

首無

桑原和真

・ルームナンバー6
御坂美琴

ミサカワースト
番外固体

氷麗

・ルームナンバー7
浜面仕上

滝壺理后

・ルームナンバー 8
花開院ゆら

蔵馬

土御門元春

・ルームナンバー 9
アクセラレータ
一方通行

飛影

・ルームナンバー 10
インデックス

打ち止め（ラストオーダー）

・ルームナンバー11
鳩

ぼたん

・ルームナンバー12（喫煙室）
ステイルⅡマグヌス

土方十四郎

「まあ、こんなところかしら。じゃあ、あとは好きにして。」
そう言って、閃可は台所に向かった。

それぞれ指定された部屋に入った十二組は、その部屋の広さに驚きを隠せなかった。

「スゲー！ 広すぎるぜ！！」

「マジで！ コレ使って良いの！？」

「広すぎるにも問題があるような・・・」

「まあ、良いじゃないですか？」

等の感想が漏れた。

因みにステイル・土方ペアの部屋はというと、

「オiiiiiiiiii！ ココもしかして、喫煙所か！？」

「まあ、嬉しい気遣いといえば嬉しいが・・・」

自分達の部屋が喫煙室である事に内心喜んでいた。

数時間後、部屋の内通電話で閃可に呼び出された一同は、彼女が作った料理を食べながら親睦を深め合った。

翌朝、全員が広間に集められ、閃可からこんな事を告げられた。

「模擬戦？」

「ええ、別世界の能力を肌で感じてもらうという事よ。」

幽助の疑問に即答で返した。

「確かにそれは、良い案ですね。」

「そんじゃ、対戦カードを組み込んでおいたわよ。」

そう言っつて背後のモニターに映像が映し出された。

そこには、神裂と首無の写真が映し出された。

「第一回戦、神裂火織 vs 首無。」

「え！？」

「成る程、ランダムというワケではなさそうだな。」

神裂は、イキナリの出来事に驚き、首無は閃可の思考に納得しがちであった。

「次に第二回戦、土方十四郎VS黒田坊。第三回戦は御坂美琴VS河童。」

「拙僧は、土方殿か。」

「ああ、宜しく頼むぜ。」

「え、私が!？」

「へえ、オイラが？」

驚く御坂とは対照的に、河童はマイペースであった。

一方の土方と黒田坊は、互いに一礼をする。

「第四回戦は一方通行^{アクセアラレータ}VS飛影。」

「ほう……ソイツは楽しめそうだな。」

「面白エ、やってやるぜ。」

一方通行と飛影は、互いに対戦相手を睨みながら闘争心の炎を密かに燃やす。

そしてモニターには、二組の写真が映った。

「最後に第五回戦、坂田銀時VS奴良リクオ。そして第六回戦、浦飯幽助VS上条当麻。」

「え〜と、僕が坂田さんと?」

「みてえだな、宜しく頼むぜ。それとそんな堅苦しくしなくても銀さんで良いぞ。」

「じゃあ、宜しく願いします銀さん。」

「そんじゃ、宜しくな上条。」

「ああ、宜しく。」

そう言って二組は、互いに相手の顔を見合わせた。

第六話：鋼線VS紐、女教皇、（前書き）

神裂VS首無、開始。

第六話：鋼線VS紐く女教皇く

「んじゃ、これから私が作った『超幻覚』のフィールドに行っ
て貰
うわよ。」

「オメエ、一体ナニモンだよ？」

六つのフィールドが用意され、模擬戦をするメンバーは、指定され
たフィールドに向かった。

残りのメンバーは、モニターからその様子を観戦する。

「それじゃあ、試合開始！」

遂に次元を超えた戦いが始まった。

鋼線VS紐く教皇女く

第6フィールド……砂のフィールドでは、神裂と首無が戦闘態勢に入った。

「必要悪の教会所属・神裂火織、参ります。」

ネセサリウス

「奴良組本家所属・首無、何時でも。」

すると神裂は、愛刀の『七天七刀』の柄を右手に持ち、鞘を左手に持つ。

「『七閃』。」

そして技名と共に、刀を抜くと同時に地面が裂けた。

「!?!」

驚く首無は、すぐさま間合いを取る。

「（今のは、斬撃!? しかし、あの刀の長さで遠くの対象を斬れるのか!?!）」

全長二メートルもある『七天七刀』を見ながら首無は、神裂の戦い方を分析する。

「（『七閃』に気付き、即座に間合いを取るとは、どうやらこの勝負、簡単には終われないようですね。）」

神裂も首無の行動を見ながら、次の策を練る。

「（落ち着け、あの長い刀で高速の抜刀は不可能だ! 何か、何か

秘密がある筈だ。」

そう思い首無は、神裂の周囲を確認する。

すると、彼女の周りに、僅かに糸のような物が見えた。

「成る程、鋼線術を使った高速斬撃だね。 抜刀はあくまでワイヤ
ーを隠すためのフェイクということかい？」

そう言っつて首無は紐を両手に持って構える。

「まさか、『七閃』の正体にすぐに気付くとは……あの青年、
決して甘くないと思っていましたが、これ程とは……」

首無の予想以上の分析力に内心驚く神裂。

モニターから戦いを観戦する五和と鳩は、互いに驚きを隠せな
かった。

「オイオイあの姉ちゃん、トンでもねえ代物隠してたのかよ!？」

「凄い……女プリエステル教皇様と互角の勝負をするなんて。」

女プリエステル教皇様とは、当時天草式のトップだった頃の神裂の異名で、現在でも天草式では彼女の事をこの呼び名で呼んでいる。

「しかし、首無さんの戦いって、一体どんな戦法なんですか？」

疑問に思う五和に、鳩はニヤリと笑いながらこう言った。

「そりゃ、トビつきりスゲーもんだぜ。」

ステージ内では、神裂と首無の戦いが続いていた。

その時首無は、彼女にこんな事を聞いた。

「ところで、一つ聞いて良いかな？」

「何ですか？」

「さっき土御門氏がキミに“模擬戦に負けたらメイド服を着て貰う

モニターから戦いを観ていた土御門はニヤニヤ笑いながらこう言った。

「フフフフフ…… “ねーちゃんのメイド姿を拝みたい” と銀ちゃんとゴリチンがワクワクしてるから待ってなよねーちゃん。」

そんな彼の右手には、メイド服が握られていた。

「ねーちゃんが負けた証には、この『墮天使エロメイド』の衣装を着て貰うにゃー！」

ワクワクする顔でそんな事を言い出す土御門であるが、左手にはセーラー服を持っていた。

「いや、どうせならセーラー服も着せた方が……」

そしたら、今度は近藤がこう言った。

「先生、どうせなら俺はバニーガールが良いです。」

そう言っつてバニーガールの衣装を手にしていた。

「そんな場合じゃねえだろおおおおおおお！」

二人のマニアックなボケにツツコミを入れる新八であったが、

「私も着ようかな・・・」『大精霊チラメイド』。／／／／／

「何でそうなの!？」

本気でそんな事を考える五和に、さらにツツコミを入れたのであった。

第六話：鋼線VS紐く女教皇く（後書き）

スタイル

「……彼、ツツコミ以外は何か頼りになさそうなんだけど。」

神楽

「仕方無いアル、新八のスキルはツツコミだけアル。それを否定したら新八はタダの眼鏡アルよ。」

スタイル

「キミ、何気に酷いね。」

第七話：鋼線VS紐（弦殺師）（前書き）

遂に首無が、本領発揮です

第七話：鋼線VS紐く弦殺師く

紐を構え、戦闘態勢に入る首無。

「行くぞ。」

「（一体……どんな攻撃を！？）」

様子を窺いながら、『七天七刀』を構える神裂。

「“常州の弦殺師”首無……それが昔の僕の呼び名ぞ。」

遂に第6ステージの対決に決着が着く。

く鋼線VS紐く弦殺師く

「『畏』……発動！」

突如、首無の体から何かを感じ取った神裂は、すぐさま体勢を立て直す。

「（来る！！）」

すると首無は、フィールドの砂を紐で巻き上げ、砂煙の煙幕を作った。

「目暗ましか！？」

そう思った神裂は刀を構え、慎重に様子を見る。

すると煙幕から、首無が跳び上がって来た。

「！！！」

自身の後ろに着地した首無へ、すぐさま振り向く神裂であったが、

「貰った！」

しかし首無には胴体があっても、頭部が無かった。

「な！？」

驚く神裂であったが、後ろから突如声が聞こえた。

「『抜け首』とは、『轆轤首』の一種で、頭が胴体から離れて活動する妖怪だ。」

振り返るとそこには、首無の頭部が浮かんでいた。

「僕はその『抜け首』の一人だね。」

「（頭と胴体で別個だったとは！）」

首無の妖怪ならではの変則的な戦いに悪戦苦闘する神裂。

「クツ……このままじゃ……」

一端退こうと、後ずさりする神裂であったが、

「喰らえ……」

突如彼女の足元から、首無の紐が螺旋状に砂の中から出現した。

「しまった！（まさかさっきの砂煙は、目暗ましではなくこれを隠すための罠！？）」

神裂が気が付いたときには、既に遅かった。

「『殺取“螺旋刃”』！！」

首無の紐が渦を巻くように、神裂の体を命中させた。

「が……は……」

「これが、奴良組の戦いさ。」

モニターから観ていた魔術サイドメンバーは、驚きを隠せなかった。

「ば・・・莫迦な！ 神裂が！？」

同僚の敗北と相手のトリッキーな戦法に、驚愕するステイル。

「驚くことじゃねえよ。大体首無自身も、あの姉ちゃんが掛かったのが偶然みてえなもんだぜ？」

鳩がフォローするようにそう言った。

「しかし、あの短時間で策を練るなんて出来るもんなのかね？」

「近くの物や手元の道具も、使い方次第では立派な武器ですからね。」

「まあ、確かにそうだな・・・」

疑問に思っただけに、蔵馬が答えると、浜面も納得する。

一方フィールドでは、

「ハア……ハア……」

首無の策にはまり、大ダメージを受けた神裂。

「クッ……！」

立ち上がるうとするも、首無の紐が襲い掛かり、そのまま彼女を縛り上げる。

「な!？」

縛られた神裂は、再び地面に叩きつけられる。

「が……はっ……」

「もう止めなよ、女性を縛るのは好きじゃない」

そう言つて首無が彼女の顔を見下ろす。

何とか抜け出そうとする神裂であつたが、その瞬間だつた。

ミシミシ、と紐が徐々に締め上げてきたのだ。

「な!?!」

「無駄だよ。その紐は捕縛癖のある女郎蜘蛛と、好きなら絶対に離さない毛倡妓の髪を編みこんであるんだ。暴れれば暴れる程徐々に締め上げる。」

自身の武器の説明をする首無に、神裂は抵抗できなかつた。

「どうする、ギブアップするかい？ 続行すならそれでも構わないけど?」

首無の問いに、神裂はこう言つた。

「いえ……私の負けです。」

「そうか、素直で助かつたよ。」

模擬戦・第6フィールド……結果は、圧倒的な実力で、神裂を追い込んだ首無の勝利。

ギブアップを聞いた首無は、すぐに紐を解いた。

「中々、良い勝負でした。お陰で良い教訓を得ました。」

第八話：侍 vs 僧侶 vs 暗殺破戒僧

モニターから二人の戦いを観る一同。

「土方さんの試合か……さて、どうでるんでしょうか？」

新八が疑問に思っても、横から沖田の声が聞こえた。

「イケエエエエ、笠坊主の旦那アアアアアアアア！ 土方をぶつ潰すせエエエエエエエ！」

「アンタどんだけ土方さん嫌ってんだよ!!！」

応援内容についてツッコミを入れる新八であった。

侍 vs 僧侶 vs 鬼の副長

第5のフィールド……森のフィールドでは、土方と黒田坊が立

っていた。

が、突如土方が背筋に悪寒を感じ取った。

「!！」

「ん、どうした？」

「い……いや、何も……（何か変な悪寒が!?!）」

「風邪ではないのか？ だとすれば無理はせぬ方が良さぞ」

「安心しろ、コイツは武者震いだ！」

「そうか、なら此方も手加減は無用！」

「真選組副長・土方十四郎、参る！」

「奴良組本家所属兼特攻隊長・黒田坊、参る！」

“鬼の副長”と呼ばれし真選組の?2と、“奴良組特攻隊長”と呼ばれし破戒僧の戦いが、遂に始まった。

モニターから観ていた近藤は、一瞬ある疑問を投げつけた。

「ん、待てよ？ 黒田坊殿は僧侶なのに戦いに人を武器を抜けても良かったっけ？」

「近藤さ〜ん、いい歳こいて破戒僧を知らないんですかい？」

すると沖田が信じられないという顔でそう言った。

「破戒僧？ 名にアルか新八？」

「破戒僧って言うのはね、肉食や不殺生などの仏の道を踏み外してもそれを恥じないお坊さんの事だよ。」

神楽も気になっていたが、新八が説明をして教えていた。

フィールド内では、土方と黒田坊が激突していた。

「ウオオオオオオオオオオ！！」

「ハアアアア!!!」

互いの武器をぶつけ合う二人。

「良いぜ黒田坊！ その武術、ウチの真選組に欲しいくらいの人材だぜ!!!」

「フツ、悪いが拙僧には、奴良組という組織がある。折角の誘いはお断りさせて貰うぞ。」

「そりゃ残念だぜ。」

会話をしながら間合いを取る二人。

「ウオオオオオオオオオオ!!!」

そして土方が迫ってくると黒田坊は、袖を掴むように右手を前へ向けた。

「行くぞ、土方殿！ 『暗器“黒演舞”』!」

次の瞬間、黒田坊の袖から、無数の武器が飛び出してきた。

「何!?!」

驚く土方は、すぐさまガードするが、全て受け切れず、そのまま吹き飛んでしまう。

「ガアアア!!!」

後ろの木にぶつかり、ズルリと倒れる土方に黒田坊はこう言った。

「スマンな土方殿。卑怯だと思っならそう思っても構わん。これが、“暗殺破戒僧”黒田坊の戦い方なのでね。」

モニターでその光景を観ていた新八。

「う・・・嘘！ これって流石にずるいんじゃない?」

「いや、新八君。戦いに卑怯という言葉は無い。あるのは、命の有無だけだ。だからアレも、立派な戦術の一つなのだよ。」

驚く新八であるが、近藤の珍しく侍らしい台詞に反論できなかった。

「って作者アアアア！ 珍しくってなんだよ!？」

「確かに、近藤さんがそんな侍らしい台詞を吐くのってありませんからね。」

「新八くんまで!？」

折角カッコよく言ったのに何だかバカにされた近藤であった。

一方のフィールドでは、

「ヘッ……やるじゃねえか……これくらいやって貰わねえと、面白くねえからな。」

そう言つて立ち上がる土方に驚く黒田坊。

「驚いたな。　まだ動けるとは!?!」

そんな彼に土方はこう言つた。

「例えどんな奴が相手だろうと、負けるわけにはいかねえんだよ。来いよ、本物の喧嘩、見せてやる。」

第八話：侍vs僧侶〜暗殺破戒僧〜（後書き）

沖田

「チツ、土方め。アレで死なねえか。」

新八

「アンタ、どんだけ腹ん中真っ黒だよ!？」

ステイル

「ホントに彼、応援する気あるのかい？」

神楽

「絶対ないアルな。」

第九話：侍 vs 僧侶 vs 鬼の副長（前書き）

グダグダな上に、短いです。

第九話：侍vs僧侶vs鬼の副長

「本物の喧嘩・・・か・・・面白い！行くぞ!!！」

遂に二人の戦いに、決着が着く。

侍vs僧侶vs鬼の副長

最初に仕掛ける土方。

しかしその斬撃には、更なる重みがあった。

「グッ!!！」

「まだまだあ!!！」

その猛攻に反撃が出来ない黒田坊。

「そこだアアアアア！」

そのまま土方は、強烈な突きを放った。

「グアツ！」

攻撃を受けた黒田坊であったが、すぐさま体勢を戻し、反撃に入る。

「『暗器・黒演舞』!!！」

再び技を放つも、

「しゃらくせエエエエエエエ!!！」

土方は、そのまま正面から飛び込んだのである。

「な!?!」

これには黒田坊本人も驚きを隠せなかった。

「ウオオオオオオオオオオオオオ!!！」

そして、渾身の一撃で見事黒田坊を倒した土方であった。

その様子を見ていた奴良組メンバーは驚きを隠せなかった。

「アイツ・・・黒を倒しやがった！」

「凄い!!」

「やはりこの勝負は、トシの勝ちみたいだな。」

そんな彼等とは違い、近藤は土方の勝ちを誰よりも信じていた。

因みに、沖田の場合は、

「チツ、土方め、死ななかつたか。」

本気でそう言っていた。

第九話：侍vs僧侶vs鬼の副長（後書き）

新八

「作者アアアアアアアア！　いくら何でもこれは短すぎだああああ
ああああ！！！」

第十話：電気と水（前書き）

御坂VS河童です。

第十話：電気と水

第4のフィールド・・・水のフィールドでは、御坂美琴と河童が位置についていた。

「行くわよ、私の実力・・・見せてあげる！」

体から電気を発しながら戦闘準備万端の御坂に対し、

「フウ・・・水が無けりゃ、絶対負けると思ってたけど、水場が戦場ならイケるかな？」

マイペースに河童はそう言った。

〈電気と水〉

「電気と水……若干一方的に勝敗が決まるようで違うものなのですね。」

「確かに、水使い⇨電気に弱いワケじゃないし、電気使いが水を被つたら、電気が使えなくなりますからね。」

「それにしても……河童の皿つて、あんな卵の殻みたいな形だったアルか？」

最後にどうでも良い疑問をぶつけた神楽であった。

得意の電気が通用しないことに動揺を隠せない御坂。

そんな彼女に河童はこう言った。

「さつき実力を見せるって言ったよね？ オイラも本気で行くから、そっちも本気で来なよ。」

それを聞いた御坂は、一瞬ニヤリと笑い出す。

「フツ……良いわ、私の本気を……見せてあげる！」

そしてスカートのポケットからゲームセンターのコインを取り出し、

「これが……私の切り札……」

一度指で弾いた後、

「『^{レールガン}超電磁砲』よ！」

それに磁力で河童に向けて飛ばした。

その速度は、通常の3倍である。

「ぶっち貫けエエエエエエエエ！」

「おっと！」

それを見た河童も、すぐに回避した。

モニターからその様子を見て、

「ええええええええ！ 御坂さん何かスゲエ技だした!？」

「カッケーなあ・・・私もやりたいヨ。」

驚く新八とは逆に、羨ましがる神楽であった。

「電気によって生み出した磁力で、コインをあそこまで・・・」

蔵馬も新八程ではなかったが、『超電磁砲^{レールガン}』には驚いていた。

そんな二人は、まだ戦いが終わっていないかった。

「さあて、次で決めるわよ！」

そう言って御坂が2発目の『超電磁砲^{レールガン}』を撃とうとするが、

「やっと完成した。」

そう言って河童の頭上には、巨大な水の球体が出現した。

「え!?!」

これには御坂も驚愕する。

「河童忍法秘伝……」

「ちょ……ちょっと!?!」

「『ミズチ球』!」

「ギャアアアアアアアア!」

見事に巨大な『ミズチ球』を喰らい、水浸しになってしまった御坂。

「ま……負けた……」

「あゝ楽しかった。」

勝負は最後までマイペースな河童であった。

第十話：電気と水（後書き）

次回、怪物と怪物がぶつかり合う！！

第十一話：怪物同士（前書き）

白と黒の対決が始まります。

第十一話：怪物同士

第4のフィールド・・・街のフィールドでは、アクセラレータ一方通行と飛影が立っていた。

「テメエとは、何時かはこオなるとは思ってたけどなア・・・まさかこんなに早くなるたア、驚きだぜ。」

「それは同感だ。」

「そんじゃア・・・」

「手加減無しの・・・」

「「勝負だ!!!」」

こうして、『白い怪物』と『黒の邪眼師』の戦いが始まった。

「オラア！」

一方通行は、電極のスイッチを切り替え、ベクトルを操作した足で真っ向から跳び込み、右手で思いっきり殴りつける。

それを見た飛影は、回避した後、得意の剣技を振るいだす。

「ハア！」

「甘エ！」

しかし一方通行は、『反射』を使い、攻撃を防御する。

「チッ！」

弾かれた飛影であったが、すぐさま後ろに退き、体勢を立て直す。

「やるな……」

「お互いにな。」

モニターを通してその様子を観ていた他のメンバーは、驚きを隠せなかった。

すると、首無と神裂、御坂と河童が戻ってきたが、

「く……まさか……こんな屈辱を味わうとは……
// //」

「何で私も着なきゃならないのよ……// //」

神裂と御坂に限っては、かなりエロいメイド服を着ていた。

「なかなか良いだろう？ 『墮天使エロメイド』に『小悪魔フリメイド』、そして『大精霊チラメイド』!!」

そう言って何故か着替えていた五和を見せる土御門。

「「っておい！」」

すぐさまツツコミを入れた二人であった。

「で……勝負の方は？」

河童にそう言われ、モニターを観る四人。

「す………凄い……あの一方通行と……互角!？」

「最強のレベル5……コレほどの実力とは………」

「そんじゃア……次で終わりにしてやるよ!」

その瞬間、一方通行が踏み付けを行った瞬間、アスファルトの道路にヒビが入り、そのまま地割れを起こした。

「!?!」

その攻撃に飛影はすぐさま電灯へ移動するも、周りのビルの窓が地割れの影響でガラスが雨のように割れ、降り注いだのだった。

「チッ！」

飛影はすぐに回避しようとしたが、まさにその時であった。

「アハハハハ、ワザワザ的になってくれてどうもアリガト。」

そう言つて一方通行が四つの竜巻を背中に接続し、飛影に目掛けて飛んで来たのだった。

その姿は、まるで天使であった。

墮ちるところまで墮ちた天使が、翼を広げ、牙を向けて来たように。

「オラア！」

ベクトルを操作された拳が、見事に飛影の顔面にヒットし、ビルを突き抜けるように吹き飛んだ。

「クッ！」

「何だア？ こんなモンかア！？ もう少し本気だせよ！！！」

「・・・・・・・・・・・・・・・・」

それを聞いた飛影は、額の鉢巻を取り外した。

その額には、第三の眼『邪眼』が大きく瞼を開けた。

「良いぜ……やってやる………」

「オイオイ飛影の奴、まさかアレを使うんじゃないやねえだろうな!？」

「そうなるほど追い込まれるという証拠ですよ。」

桑原と蔵馬は、そう言って飛影の戦いを観ていた。

「アレ?」

二人の話を聞いていた神裂も、それが何か疑問に思った。

「行くぞ！」

飛影は、両手から炎を発し、そのまま拳で殴り付けた。

「『邪王炎殺煉獄焦』！！」

「！！」

一方通行は、すぐに『反射』に切り替えようとするが、飛影の速度には追いつけず、殴り飛ばされる。

「ガア！」

すぐに立ち上がり、体勢を立て直す一方通行。

しかし彼の眼はまるで笑っていた。

「……しれエ……」

「（何だ……この凄まじい……感覚は？）」

「最ッ高オに面白エぞオオオオオオオ！」

「!?!」

その瞬間、一方通行の背中から噴出するかのように、墨のような漆黒の翼が大きく広げられた。

「悪イが、こつから先は一方通行だ！ 負けても文句は無しだア！」

「ああ、良いぜ。 久々に楽しめそうだ!?!」

こうして、二人の『怪物』の戦いは、第2ラウンドへと変わった。

第十一話・怪物同士（後書き）

続きます。

第十二話：BLACK&WHITE（前書き）

久々に更新します。

第十二話：BLACK&WHITE

「うおおおおおおおおおお！」

「ハアアアアアアアアアア！」

アクセアレータ
一方通行の翼と飛影の炎。

二つの『漆黑』がぶつかり合う。

どちらとも互角・・・まだ勝負は続いていた。

BLACK&WHITE

「何っー戦いしてんだよ!？」

「レベル越えてますね」

驚く桑原とは対照的に蔵馬は呑気にお茶を飲んでいた。

「いや、冷静になりすぎですよ！ アンタもう少し驚けよ!!！」

「いや、そんなオーバーなりアクションが出来ませんので」

「オーバー扱い!？」

余りにも冷静な蔵馬の発言に驚きを隠せない新八であった。

「ウオオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアアアア！」

あまりにも激しいを抜く戦いを繰り広げる二人。

「チツ！」

「クソがッ」

体力の消耗の激しくなり、二人は息が上がっていた。

「ハア…………ハア…………」

「ハア…………ハア…………」

アクセラレータ
一方通行は首の電極に手を当てる。

脳にダメージを負っている彼は能力をフルに使えるのは30分が限界であるため、好き勝手な戦闘は出来ないのだ。

「（後…………10分つてところかア…………上等だぜ…………）」

「そう思いながら飛影を見る。」

「（幽助以来だ…………此処まで良い勝負が出来たのは…………）」

「そう思いながら飛影もニヤリと笑った。」

「お互いに……負けられない理由があるみたいだな……」

「当たり前だろオが……俺には、負けられない理由があんだよ。だから……絶対に負けられねェんだよ！」

その瞬間、一方通行の翼が墨のような漆黒から雪のような純白に変わり頭上には同色の輪が浮かんでいたのだった。

「な……なななな何だあの翼はアアアアアアアアアア！」

「凄い……あの姿は……まるで……『天使』だ」

一方通行の翼に驚きを隠せなかった桑原と蔵馬。

「あの翼は……本当に……『科学サイド』が生み出したモノなんですか!？」

「まるで……魔術を施しているようだ……」

神裂もステイルも、その光景に言葉を失くした。

「アレが……一方通行の……第一位の真の力だって言うの!？」

「マジかよ!？」

「むぎのが第四位になる程の理由……何か分かった気がする」

無論、『科学サイド』メンバーも驚きを隠せなかった。

「コイツで決めるぜ……」

「ならば……本気を出さんのは失礼のようだな!」

そう言つて飛影は剣に妖氣を通し、そこに漆黒の炎を召喚する。

「ハアアアアア．．．．．『邪王炎殺剣』！！」

「うおおおおおおおおおおおおお！！」

「はああああああああああああああ！！」

白い翼と黒い炎．．．遂に互いの『切り札』を放つた一方通行と飛影。

すれ違い様に反対方向の位置に立つ二人。

「．．．．．」

そして次の瞬間、ボタンと互いに倒れたのである。

つまり、引き分けであった。

「ひ……引き分け!？」

「ひ……飛影がここまで!？」

「見事な戦いですね」

飛影が倒れた事に驚きを隠せない桑原とぼたんとは違い、冷静に判断する蔵馬。

「あの……一方通行が……引き分けで!？」

「アイツ……強すぎる!？」

『科学サイド』のメンバーは、一方通行が引き分けになるといふことに驚きを隠せず、

「本当に彼の翼は科学で生み出された能力なのでしょうか？」

『魔術サイド』の神裂は未だに翼に驚きを隠せなかった。

「兎に角、運びますか。 桑原君」

「おつよ」

すぐにフィールドに向かった蔵馬は飛影、桑原は一方通行を運んだ。フィールドから出た後、二人からユックリと下ろされる飛影と一方

通行。

隅に座った飛影はすぐさま眠り、ソファに座った一方通行は、

「お疲れ様ってミサカはミサカは缶コーヒーを渡してみたり」

「・・・・・・・・・・・・・・・・ありがとうな」

打ち止め（ラストオーダー）から渡された缶コーヒーを飲んだのであった。

第十二話：BLACK&WHITE（後書き）

次回、リクオVS銀時&上条VS幽助！

第十三話：ぬらりひよんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵（前書き）

久しぶりの投稿！

主人公各のバトルです。

第十三話：ぬらりひょんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵

「もうすぐリクオ様の試合……」

「この勝負、絶対に若が勝つぜ！」

「そうとは限らん」

「あの銀時という男、木刀を使っているとは思えない戦法の持ち主だからな」

などと奴良組のメンバーはモニターを凝視していた。

「ウラアアアア！」

「うおおおおお！」

ぬらりひよんの孫と白夜叉。

二人の剣劇はさらに加速した。

「オラあ！」

「フン！」

銀時が薙ぎ払いをするが、リクオはかわし、逆に斬り上げをするも銀時にかわされる。

「へ、やるじゃねえか！」

「アンタもな」

競り合いから距離を取った二人。

互いにニヤリと笑いながら刀を構えていた。

〜当麻VS幽助〜

第1のフィールド……『大地のフィールド』では、上条と幽助が互いに構えていた。

「行くぜ幽助」

「何時でも良いぜ！」

能力者と妖怪。

全く異なる能力を持つ二人は互いに走り出し、

「うおおおおおおおおお！……」

拳を握りながら思いつきり撃ち込んだ。

バキツという音と共に、互いの顔に相手の拳がめり込んだ。

「ぐっ」

「くっ」

一度よろめくが、すぐに体勢を立て直し、

「うおおおおおおお！」

「おらあああああ！」

再び拳を突き出した。

再びよろめく二人であったが、すぐさま距離を取った。

「（いつ痛く・・・こんなに強え一撃、生まれて初めてだぞ！）」

科学と魔術の戦いに足を踏み入れた上条にとっては、幽助はそれ以上の強さであり、

「（結構良い一撃じゃねえか。コイツは禪締めて掛かんねえとな）」

妖怪や能力者との戦いを繰り返した幽助にとっては、上条はその中に入る実力者だと認識していた。

「行くぜ！」

すると幽助は、右手の人差し指を鉄砲のように構え、

「レイガアアアアアアアア！」

必殺技の『霊丸』を放った。

「喰らうかよ！」

上条はすぐさま右手を突き出し、無効化させた。

「おいおい、まさかと思って試したけど、本当に無効化出来るのかよ」

「まさかそこまで威力の高い技が出せんのかよ」

互いに相手の能力を見て、更に身構える二人。

（控え室）

映像を観ながら今の状況に驚く一同。

「す……スゲエ……」

「リクオ様……楽しんでるようだ」

「銀さんも楽しそうですよ」

まるで戦いを楽しんでいるリクオと銀時に、奴良組メンバーや万時屋メンバーは驚きを隠せないでいた。

「フン、幽助め……久しぶりに手応えのある奴に会えて楽しんでい
やがる」

「みてえだな」

「彼らしいですね」

浦飯チームメンバーは、楽しんでいる幽助に呆れるつつあるが、

「アイツ……何か楽しんでるわね」

「だろオナ。 殺し合いでも何でもねエ、ただの試合だからな」

楽しそうな顔をする上条を観て、苛立ちを見せる御坂に、一方通行
は溜め息混じりにそう言った。
アクセアレータ

だが彼等は知らなかった。

幽助とリクオは、この戦いで新たな力を得る事を…

第十三話：ぬらりひよんVS白夜叉&幻想殺しVS霊界探偵（後書き）

次回、魑魅魍魎の斬魄刀

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（前書き）

リクオの新たな力、遂に登場！

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀

模擬戦が始まる前、リクオは夢の中にいた。

それも、何にもない草原だけの世界に。

「何だ、此処？」

リクオはそう言いながら周りを見渡す。

すると、あるモノに注目する。

「ん？」

それは、雪のように白い着物を身に纏った長い銀髪の女性であった。

「奴良リクオ様ですね？」

「ああ…アンタは？」

訊ねられたリクオは、女性に名前を問うが、

「私ですか？ 私の名前は　　です」

「…！！（聞こえない？）」

まるでノイズが入ったように、女性の名前が遮られた。

「どうやら、私の声が届いていないようですね」

そう言って女性は、ゆっくりと瞼を閉じた。

魑魅魍魎の斬魄刀

「　　！！」

一瞬、リクオは夢の事で気を取られてしまったが、すぐさま距離を取り、刀を構える

「（何だ？　一瞬誰かと話してたような…）」

一体何が起きたのかが分からないリクオであったが、そんな暇を与えない銀時の猛攻が続く。

「クツ！」

「オラオラオラア！」

まったくすきを与えない銀時。

「オラアアアアアアアア！」

さらに強力な一撃を喰らい、リクオは吹き飛んでしまう。

「ガア！」

吹き飛ばされ、そのまま倒れてしまつりクオ。

「く……あ……」

「悪いなりクオ。　この勝負、俺の勝ちだな」

不適な笑みを見せる銀時。

果たして、リクオは銀時に勝てるのだろうか。

一方の上条VS幽助戦では…

「（異能を打ち消す能力者か……でも………）」

幽助は、再び走り出し上条に接近する。

「な!？」

その異常を超えたスピードに驚きを隠せない上条。

「（マジかよ！ どんな速さで動いてんだよ!?!）」

上条当麻は、今まで戦った相手の中で様々なタイプの人間を見てきた。

世界中で20人しかいない聖人の神裂や最強のレベル5の称号を持つ一方通行アウセアラクタのような当時から能力チカラを得た“生まれつきタイプ”、一つ

の技に長けた土御門のような（天才タイプ）、そしてレベル1から自力でレベル5になった御坂のような“努力家タイプ”なら分かる。しかし、幽助のような“戦いの中で成長するタイプ”の相手は、生まれて初めての出来事である。

幽助は、素早い動きから懐に入り、左手で上条の右手を強く握り、

「取った！」

そのまま右手で、霊丸の構えを取る。

「飛び道具系の技は打ち消せても」

霊丸を撃とうとしたその時であった。

「！？（霊丸が……霊丸が撃てない！？ どういう事だよ！？）」

妖気が放てなかったのだ。

幽助の作戦は、“右手を使わせない用に強く握り、その状態で霊丸を放つ”という作戦であったが、右手を握った瞬間に能力を無効化されたのだ。

「（おいおいマジかよ！？ 能力者に触れるだけでも無効化出来るのかよ！？ 何なんだよコイツ！？）」

焦りを見せた幽助に、上条は右手を振り、幽助の拘束を振り払うと、

「ウオオオオオオオオオ！」

そのまま右手で幽助を殴り飛ばした。

「う……浦飯がふっ飛ばされた!？」

「能力者自身に触れたら……」

「能力そのものを封じれるのか!？」

上条の能力に、浦飯チームメンバーは驚きを隠せなかった。

「いくら幽助でも、能力の無効化はやばいんじゃない?？」

「で、でもよう、浦飯には身体能力があるじゃねえか」

「奴が鈍っていなければな」

心配するばたんに桑原がそう言うが、飛影からそう言われたため冷汗を掻いた。

一方のリクオは、

「クソ……」

「おいおい、さっきまでの威勢は何処いったんですかコノヤロー」

「（これほど差があるなあ……これが戦闘経験ってヤツか？）」

ポロポロの身体を起こし、刀を構えるリクオ。

「（どうすれば……）」

悩むリクオであったが、

『リクオ様』

「!?!」

その時、夢で見ていた長い銀髪の女性が現れた。

「アンタは!?!」

『アナタはまだ私の名前を呼んでいない』

「名前!?!」

『私の名を呼び、己の眠りし力を解放するのです』

その瞬間、リクオの動きが止まった。

突然の事に驚く銀時は、木刀を構える。

『全ての妖怪を治める百鬼夜行、それを束ねる魑魅魍魎の主に対応しき力………叫べ、我が名を!』

その瞬間、リクオの眠りし力が覚醒し、

「映せ『鬼纏姫』!」

凄まじい光が放たれた。

「!？」

銀時は、その光景に驚きを隠せなかった。

光が晴れると同時にリクオの手には、三日月を模した鍔に柄には鎖で繋がれた菱形の枠の中に「畏」と描かれた装飾が突いた日本刀が握られていた。

「行くぜ銀時、コイツが俺の新しい力・斬魄刀の『鬼纏姫』だ」

遂に、戦いはヒートアップする。

第十四話：魑魅魍魎の斬魄刀（後書き）

次回、魔族の『畏』

第十五話：魔族の『畏』（前書き）

幽助にも変化が！！

第十五話：魔族の『畏』

斬魄刀『鬼纏姫^{まといひめ}』を解放したリクオ。

それを観ていた閃可はニヤリと笑いながらこう言った。

「遂に目覚めたのね、死神の力が」

魔族の『畏』

「さくせ……」

するとリクオの姿は一瞬で消え、

「よっ」

「な!？」

いつの間にか銀時の懐にいた。

「ハアッ!」

「グッ!」

リクオの斬撃を受け止めた銀時であったが、

「どうした? いつの間にか威勢がなくなったぜ?」

「クッ!」

するとリクオは距離を取ると、刀身を地面に刺す。

「『暗器・黒演舞』」

その瞬間、地面から幾つもの武器が出現し、銀時を襲つ。

「クソッ!」

かわしきれず、幾つもの傷を追つ銀時。

「今のは、拙僧の黒演舞！？」

「何故若が！？」

黒田坊は、自身の技を使うリクオに驚く。

他の奴良組メンバーも、これには驚いた。

「成る程、アレがリクオの斬魄刀の能力か……………」

閃可はそう言って分析を行っていた。

リクオ本人は、刀を構え、

「いくぜ」

『明鏡止水』による瞬間移動で、銀時の懐に飛び込み、彼の喉元に刃を突き立てた。

「!?!」

これには銀時も驚きを隠せなかった。

「まだやるか？」

その言葉の意味に銀時は、

「いや、降参だ」

刀を納めたのであった。

坂田銀時VS奴良リクオ…勝者・奴良リクオ。

一方の上条VS幽助の戦いは、

「ウオオオオオオオ！」

攻撃にキレが無くなった幽助は、我武者羅に拳を振るった。

上条は、そんな幽助の攻撃をかわしながら攻撃の隙を探っていた。

「クソ！ 全然当たらねえ！！！」

徐々に攻撃が鈍りだす幽助に、

「ウオオオオオオオ！」

上条が一撃を叩き付けた。

「浦飯の奴、攻撃にキレが無くなってやがる！」

「上条君の異能の無効化で動揺してるんだ」

「あのバカが！ 油断するからこんな事になるんだぞ」

桑原達も驚きを隠せなかった。

「（そろそろか……）」

しかし、閃可は何故か冷静であった。

「（クソッ！ 霊丸が効かねえってことは、霊光波動拳が効かねえ
つてのと同じじゃねえか！！）」

徐々に焦りを見せる幽助。

しかし一瞬、彼の体に変化が起きた。

「ん？ 何だ？」

まるで煙のようなモノが体から噴き出てきたのだった。

「（まさか……いや、確かめるしかねえ！！）」

すると幽助はゆっくり目を閉じ、拳を下ろした。

「（何だ……一体？）」

上条本人も窺いだす。

するとその時、

「ウオオオオオオオオオオオオ！！」

幽助の体から、煙のようなモノが一気に噴出した。

「な、何だ！？」

動揺を隠せない上条であったが、煙が晴れると同時に

「な！？ 嘘だろ！？」

目の前の出来事に驚きを隠せなかった。

そこには、腰まで伸びた髪に隈取のような青い模様、そして肌の色が褐色に近い幽助の姿であった。

「どうやら、これが俺の新しい力みてえだな」

リクオ達の『百鬼夜行の世界』の妖怪達の持つ力『畏』によって、幽助は新たな力を得たのであった。

「何だよ、それ!？」

驚きを隠せない上条に幽助はこう言った。

「悪い、上条。上手く右手で消してくれよ」

「え？」

その言葉にキョトンとする上条であったが、

「多分、手加減は出来ねえぜ!」

「!!!」

幽助が放った霊丸を目にして、咄嗟に右手で打ち消した。

イメージブレイカー

「ハア……ハア……ハア……トンでもねえ技だぜ。
これ程とはな」

そうやって上条は周囲を見ると、自分のいる位置以外が殆ど吹き飛んでいたのである。

「スゲエな、幽助」

疲れて眠っている幽助に上条はそう言った。

「俺の負けだな、コリヤ」

上条当麻VS浦飯幽助…勝者は幽助となった。

その光景を観ていた浦飯チームのメンバー。

「あの野郎、またトンでもねえ力あ手にしやがって！」

「フツ、彼らしいですね」

「久々に楽しめそうだ」

そんな中閃可は、

「斬魄刀を手にしたリクオと『畏』を手にした幽助……あとは上条だけね」

そう言ってニヤリと笑った。

果たして、その意味とは？

第十五話：魔族の『畏』（後書き）

次回・Wの参上／新たな仲間登場

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（前書き）

新たな仲間登場です。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場

模擬戦も終わった翌日、全員が集まった。

「今回の模擬戦でとりあえず判明した事は、リクオと幽助にそして当麻の三人に異世界の能力が使える素質があることだ」

「「「エエエエエエエエエエエエエエエエ！？」」」

これには幽助、リクオ、そして上条が驚いた。

「いや、当麻は兎も角、幽助とリクオは気付いてなかったのか？」

Wの参上／新たな仲間登場

「まずリクオだ。アナタには死神の能力の一つである『斬魄刀』、そして幽助には『百鬼夜行の世界』の能力『畏』おそれが発動されている」
それを聞いたリクオは自分の腰に差した刀・鬼纏まといひめ姫を見る。

幽助もまた、模擬戦での出来事を拳を見ながら思い出す。

「でも、閃可さん？ 上条さんは一体どんな素質が備わっているのでしょうか？」

上条は手を挙げながら質問すると、閃可はキツパリ答えた。

「仮面ライダー」

「「「「はい？」「」「」」

その答えに全員がキョトンとなった。

「すみません、もう少し分かり安くお答えできないでしょうか？」

上条がそう言ったその時、

「イツテ〜、タイミング良く出て来いって言われても流石に無理があるだろ！」

「翔太郎君、声が聞こえてるよ！」

「いや、もう遅いよ」

「以下同意」

「へ？」

突然の声に全員が振り向いた。

そこにはソフト帽を被ったスーツ姿の青年にラフな格好をした髪をクリップで留めている青年、ポニーテールで動きやすい格好の女性、そして赤い革製のジャケットと赤いズボン姿の青年が現れた。

「ちよつとオオオオオオオオ！ 何イキナリ出てきてるのオオオオオオオオ！？」
「まだ登場までは早すぎるよー！」

「いや、そうは言われてもよ」

閃可とソフト帽の青年が口論みじた会話をするも、

「え〜と、そちらの方々は何者でしょうか？」

そう言うとソフト帽の青年、クリップの青年、革ジャンの青年、ポニーテール女性の順番で自己紹介が始まった。

「おっと失礼。俺の名は左翔太郎、探偵だ」

「僕は相棒のフィリップ」

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ」

「私はその妻兼探偵事務所所長の亜紀子です」

それを聞いた上条は、閃可に再び問い出した。

「あの、この方々と俺の素質の関係は？」

その問いに閃可は分かり安く説明をした。

「仮面ライダー、世界を危険に陥れようとする怪人たちに立ち向かう戦士……言わば守護者みたいな存在で、当麻にはその仮面ライダーに変身できる素質があるの」

「マジですか！ 上条さんはこれでもヒーローに憧れてました！」

「凄い反応ね」

嬉しそうな反応をする上条に、閃可は呟く。

「それで、どうやって変身するんだ？」

「これよ」

閃可は上条にあるモノを投げ渡した。

「おっと……ん？ USBメモリ？」

「後のことは彼等に聞けば分かるわ」

そう言って説明役を翔太郎達に任せた。

「んじゃ、説明するぜ」

何処からか持ち出したホワイトボードにメモリの説明を図で示す翔太郎。

「コイツは『ガイアメモリ』ってな、コイツは一見USBメモリのように見えるが、実は地球のあらゆる『記憶』を宿している。そしてこのメモリを使った人間は、超人的能力を持つ怪物・ドーパーントに変身するんだ」

「人が怪物に!?!」

「まさか閃可、アナタは上条当麻にその怪物に変身しろと!?!」

神裂の疑問に翔太郎が答える。

「全く、早とちりなお嬢さんだな。今から続きを説明するぜ」

そう言っつて翔太郎はあるモノを取り出す。

「コイツはガイドドライバーって言っつて、こいつに付いているスロットにメモリを差し込むことで、メモリの力を制御できる代物なんだ」

「そしてこのメモリとドライバーを使っつて変身して戦う戦士を仮面

ライダーと呼んでいる」

先程渡されたメモリを見ながら、上条は深く考えた。

「じゃあ、俺もその仮面ライダーになれるってことなのか？」

「そう言うことだ」

「しかし仮面ライダーに変身できると言っても、今の君の戦い方やドーパントには勝てない筈だ」

フィリップの言葉に、どれだけ強いんだよとドーパントの恐ろしさを想像してしまう上条。

「そこでだ。上条当麻、俺の下でライダーとしての特訓をしねえか？」

「特訓？」

「そうだ。まずは体力勝負で負けるわけにはいかないからね」

ソレを聞いた上条は拳を強く握り締め、

「俺、やります。いや、やらせてください！」

それを聞いた翔太郎は、サムズアップをする。

「決まりだな！」

「ん？でも、俺やリクオは誰に付けば良いんだ？」

「あ、そう言えば」

幽助とリクオの疑問に閃可は答えた。

「安心して、既に来てるわ」

「どうい」

言いかけた幽助であったが、突如気配を察知し、すぐさま振り向いた。

「まさか、気配だけで気付くとはな」

そう言ってバンダナを付けた黒髪に背中に七本の鎌を背負った少年がいた。

その後ろに赤い羽織の中世的な顔の青年、亀のような外見の異形がいた。

「リクオと同じ世界から来た、遠野妖怪・カマイタチのイタクだ」

「同じく、天邪鬼の淡島だ」

「オイラは沼河童の雨造」

遠野妖怪のメンバーが三人現れた。

「話しは聞いている。お前が浦飯幽助だな？」

「ああ」

「俺はこれからお前の教育係りになる事になった。ビシビシ鍛えるつもりだから、手は抜かねえぞ」

「そうしてくれ。そっちの方が面白えからな」

幽助のヤル気満々の表情に奴良組メンバーは若干引いた。

「若!」

すると、黒いフードを被った2mもある長身に刀を所持した青年が現れる。

「猩影(君)!?」

それは奴良組幹部の一人・猩影であった。

「話しは聞いてます、俺も若や皆に付いて行きますぜ」

それを聞いて、リクオは答える。

「頼むよ、猩影君」

「はい!」

すると閃可は、何かを思い出したようにこう言った。

「リクオは暫らく待ってくれる?」

「え？ 僕は別に良いですけど」

「よし、じゃあ特訓は明日行つわよ」

しして翌日、上条と幽助そしてリクオの特訓が行われるのであった。

すると銀時は、ふと疑問に思った。

「なあ、俺にも素質ってあるのか？」

それを聞いた閃可は、サラッとこう言った。

「特に無い」

「ガアアアアアアアン！」

思いっきり落ち込んだ銀時であった。

第十六話：Wの参上／新たな仲間登場（後書き）

次回、三人の特訓

第十七話：三人の特訓（前書き）

久々の投稿です。

第十七話：三人の特訓

上条当麻、浦飯幽助、そして奴良リクオは、特別な鍛錬場で修行を開始した。

果たして、三人は新たな力を使いこなせるだろうか……

三人の特訓

（リクオ篇）

奴良リクオは現在、岩場のフィールドにいた。

「一体誰なんだろう？」

講師が来ないため、どんな人物が来るのかが聞かされていないリクオ。

すると、後ろから声を掛けられた。

「キミが、奴良リクオ君だね？」

「あ、はい。　そうですけど……」

名前を呼ばれたリクオが振り返ると、そこには長い白髪に黒い和装に白い羽織りを来た穏やかそうな男性がいた。

「俺は君等で言う『死神の世界』から来た、浮竹十四郎だ。　閃可という子に頼まれて、キミの修行を見て欲しいと頼まれたんだ」

「そうでしたか、よろしくお願いします！」

「よし、まずは斬魄刀の説明からするよ」

フィールド場から図書館に場所を変えたりクオは、浮竹から斬魄刀の指導を受けていた。

「良いかい？ 斬魄刀とは、死神の魂から生み出された武器で、皆名前とその本体を持って生きているんだ。無論、一人ひとりによって特性が違う部分もある」

「魂から……」

「そう、死神は斬魄刀の能力を理解する事で初めてその力を解放できるんだ。中にはそれを理解できずに道具扱いする者もいるけど」

「あ……」

この時リクオは、夢の中で『鬼纏姫^{まといひめ}』の本体と出会っていたため、それがどう言う意味かがすぐに理解できた。

「つまり、僕の前に現れた銀髪の女性が鬼纏姫^{まといひめ}の本体で、僕の魂の一部そのものなんですな！」

「お、理解が早いね。それじゃすぐに鍛錬場に移って実践だ。無論、君自身の能力なしで斬魄刀の能力だけで戦ってもらおうよ」

「はい！」

こうしてリクオは、浮竹と共に鬼纏まといひめ姫の能力を理解するために、鍛錬場に移動したのであった。

（上条当麻篇）

上条当麻は、草原のフィールドで翔太郎と組み手をしていた。

探偵修行で護身術のイロハを叩き込まれた翔太郎の体術に身体が追いつけず、翻弄される上条。

「グッ！」

「オラア！」

「ぐあー！」

回し蹴りを喰らい、吹き飛ばされる上条にフィリップはこう言い出

す。

「成る程、上条当麻。　どうやらキミは、自分より身体能力の高い相手に勝った経験は無いね？」

「!?!」

凶星を突かれて驚きを隠せない上条。

「確かに……………そうですけど……………」

実は上条は、記憶を失う前は聖人である神裂に負けた経験があり、記憶を失った後も殺しの技を徹底的に磨き上げた土御門、そして神裂と同じ聖人である『神の右席』の一人・後方のアツクアと言った身体能力が非常に高い相手に敗北した経験がある。

「まずキミに必要なのは、身体能力の向上だ。　いくら『幻想殺し（イマジンプレイカー）』でも、身体能力のみが武器の相手と戦う時は無に等しいからね」

「う……………ごもつともです」

「それで、どうするんだフィリップ？」

「翔太郎はジョーカーに変身して彼と戦ってくれ。　そこから僕が彼に合わせた戦い方を見つけるよ」

「分かった。　頼むぜ相棒」

【JOKER】

そうやって翔太郎は、ロストドライバーのスロットにメモリを挿入する。

「変身！」

【JOKER】

次の瞬間、翔太郎の姿がW型の銀色の触覚に赤い複眼、そして黒いボディの戦士に変わった。

その名は、仮面ライダージョーカーである。

「か………カツコイイ！」

見惚れてしまう上条であるが、

「おい、当麻。見とれるのは勝手だが、修行にも気合入れろよ」

「あ、はい！」

ジョーカーにツッコまれ、我に返ったのであった。

果たして、フィリップが見つけた上条に合わせた戦い方とは！？

浦飯幽助篇

浦飯幽助は風のフィールドで、イタクと模擬戦を行っていた。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

「オラオラオラオラア！」

鎌と拳がぶつかり合い、互いに距離取る二人。

「成る程な、相当な修羅場を潜ってるようだな」

「へん！ 伊達にあの世は見てねえぜ？」

二度の死を経験した幽助にとって、命を賭けた戦いは日常茶飯事であつた。

「兎に角、俺は自分の『畏』の属性を知らなきゃならねえんだろ？」

「ああ、だからこうやって模擬戦でさっきの戦いの記憶を呼び起してるんだろっが」

「身体で聞くってやつか、上等じゃねえか！」

「ウオオオオオオオオオオ！」

「オラアアアアアアアア！」

因みにこの戦いは、約三十時間も続いたのであった。

果たして、幽助は自分の『畏』の属性を知ることには出来るのか？

第十七話：三人の特訓（後書き）

次回・魔導師とマフィアと死神との出会い

本編での三人の修行は、彼等の回想シーンという形で書きます。

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い（前書き）

魔導師、死神、マフィアの登場です。
重要さんのネタを少し入れてます。

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い

閃可が翔太郎と照井を呼び出す。

「何だと!？」

驚く翔太郎とは対照的に冷静な照井に彼女はこう言った。

「一刻も早く向かって欲しいの。丁度良い挨拶代わりになるけどね」

果たして、閃可の言葉の意味とは？

閃可の幼馴染・真之介は、『死神の世界』、『魔導師の世界』、『マフィアの世界』のメンバーと共に健康ランドからの帰りであった。

「ん、良い湯だったぜ」

「ホントでしたね」

「うんうん」

黒崎一護達は温泉で温まり、気分が良かった。

すると、二人の黒服の男に遭遇する。

「何だ、アンタ等？」

一護がそう言うと、

「『死神の世界』、『魔導師の世界』、『マフィアの世界』の者達

か

「我々は次元の破壊者様の目的のため、排除する」

二人の男は、戦闘態勢に入るが、

「オラァ！」

一護に蹴り飛ばされた。

「凄いです一護さん！」

沢田綱吉（以下ツナ）がそう言うと、一護がこう言った。

「いや、こいつ等がメチャクチャ弱かっただけだから」

すると男たちは立ち上がり、懐から何かを取り出した。

「見せてやろう、我々の本気を」

それはUSBメモリであった。

「ハア？ USBメモリで戦うつもりかよ、バカだろお前等」

獄寺隼人がそう言い、他のメンバーも頷く。

「ヤバイ……」

真之介だけは違った。

「一護、ソイツ等からメモリを奪い取れ!!」

「え?」

疑問に感じた一護であったが、その時男たちはメモリのボタンを押した。

【マグマ】

【アイスエイジ】

メモリを腕に押し付けた瞬間、男の片方がマグマの炎のような怪人、もう片方が氷をイメージしたような白い怪人に変身した。

「何!?!」

これには驚く一同。

「ウオオオオオオオオ!」

マグマの怪人は、高熱弾を雨のように発射した。

「うおお!」

一護は斬魄刀・斬月で防ぐが、

「グッ!」

炎の威力が高すぎて、吹き飛ばされてしまふ。

「ガア！」

「一護君！」

高町なのはが助けようとするが、

「ハア！」

白い怪人は手から冷凍ガスを放ち、なのはの足を凍らせる。

「あッ！」

「なのはさん！」

ツナはハイパーモードになって戦おうとするが、

「無駄だ！」

炎の怪人は拳で殴り飛ばした。

「グア！」

「十代目！」

各世界の代表が追い込まれる強さに、全員が恐怖し始める。

勝てない　そう思ったその時であった。

「そこまでだぜ」

二人の男がバイクに乗って現れた。

一人はソフト帽を被ったスーツ姿の青年、もう一人は革製の赤い服を着た青年。

「ダメです！ 逃げてください！！」

フェイト・T・ハラオンが叫ぶが、スーツ姿の青年がこう言った。

「安心しな。こいつ等に関しては、専門だからな」

【JOKER】

「そついうことだ」

【ACCEL】

「あの人達と同じメモリ!?」

「まさか、あの人達も変身するんか!?!」

八神はやてがそう言うが、そんな事も気にせず二人は腰のベルトにメモリを差し込んだ。

「変身!」

【JOKER】

「変……身!」

【ACCEL】

その瞬間、スーツ姿の青年はW型の銀色の触覚に赤い複眼を持つ黒いボディの戦士、青い複眼にバイクをイメージした赤いボディの戦士に変わった。

「さあ、お前の罪を数えろ!」

「さあ、振り切るぜ!」

仮面ライダージョーカーとアクセルが此処に光臨したのであった。

アクセルは白い怪人・アイスエイジドーパントに立ち向かった。

「ハア！ タア！」

アクセルは専用武器・エンジンブレードを振るいながら、アイスエイジドーパントを斬り裂く。

「グッ！」

「ハア！」

吹き飛ばされたアイスエイジドーパントは冷凍ガスを放つが、

【ENGINE・STEAM】

アクセルはエンジンブレードにメモリを差し込み、刀身から蒸気を放つ。

蒸気の熱に冷凍ガスを無効化されたアイスエイジドーパントは、そのまま蒸気を喰らう。

「グアアアアア！」

「剣から蒸気が出るだど!?!」

「面白い戦いだな」

ウィータは驚き、シグナムは興味深く観察する。

一瞬の隙を狙ったアクセルは、左グリップのレバーを引いた。

【ACCEL MAXIMUM DRIVE】

その瞬間、アクセルのボディは燃え上がり、そのまま回し蹴りを叩き込んだ。

「ハア!」

必殺技・アクセルグランツァーが決まり、

「絶望が、お前のゴールだ」

「グアアアアアアア!」

アイスエイジドーパントは爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕かれた。

一方のジョーカーは、マグマの怪人・マグマドーパント戦っていた。

「ハア！ オラア！」

真っ向からの格闘戦で攻めるジョーカー。

マグマドーパントは一端引くと、火炎弾を発射するが、

「オラア！」

ジョーカーはお構い無しと言って良い程に、それを蹴り飛ばした。

「な！？」

蹴り飛ばされた火炎弾は、そのままマグマドーパントに命中した。

「グア！」

「あの弾を全く動じずに蹴り飛ばすだ！？」

「なんつうー戦い方してんだよ！」

ジョーカーの戦いに石田雨竜と阿散井恋次は驚きを隠せなかった。

「いくぜ」

そう言つてジョーカーは、メモリを一端取り出すと、右腰のマキシムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ライダーキック！」

跳び上がる同時に、紫色のエネルギーが纏つた右足でキックを叩き込んだ。

吹き飛ばされたマグマドーパントは苦しみ出し、

「これで決まりだ」

「グアアアアアアア！」

爆発と同時に元の男の姿に戻り、メモリも砕かれた。

「あの化物を倒しただと……」

「何て奴等だ……」

全員が二人の強さに驚きを隠せなかった。

変身を解いた翔太郎と照井は、すぐさま彼等の元へ向かう。

「怪我はないか？」

「あ……ああ」

一護がそう言うと、

「左翔太郎と照井竜……何でアンタ達がいるんだ!？」

真之介が驚いたように質問した。

「俺に質問するな　と言いたいと事だが」

「ああ。　まあ、とりあえず……アイゼンハウワーって人のところへ行くぜ」

そうやって彼等は真之介の知り合い・アイゼンハウワーの住んでいる屋敷に向かった。

屋敷に向かうと、一人の少女が待っていた。

「遅い！」

真之介の幼馴染の閃可であった。

「せ……閃可!？」

「早く入りなさい！ 話をしておくから!!」

そう言われ全員が中へ入る。

「あ、おかえり」

「やあ、待ちわびたよ」

そう言ってフィリップや亜紀子、そして各世界の住民達が出た。

「お前……どこまで!？」

「そうよ。『科学と魔術の世界』、『百鬼夜行の世界』、『霊界

探偵の世界』、『侍の世界』、そして『Wの世界』の住民を連れて来たの」

「成る程……」

驚く真之介に閃可は自身満々気にそう言った。

「真之介。誰なんだよ、こいつ等？」

一護の言葉に、真之介はこう答えた。

「閃可が連れて来た、これからお前等と戦う仲間だ」

ドーパントの説明を行った閃可は、その後にこんな企画を出した。

「明日から別世界の戦い方を学ぶために模擬戦を行うから、必ず早起きをする事。良いわね？」

それを聞いたなのはは、魔導師達を代表して答えた。

「構わないよ。六課でも良くやってたし」

それを聞いたツナも答える。

「俺も良いですよ」

そして一護も答える。

「俺も良いぜ。別に命賭けるワケじゃないねえだろ？」

続いて上条も答える。

「俺も良いよ。準備は出来てる」

リクオも答える。

「僕も構いませんよ」

翔太郎も答える。

「構わないぜ。一緒に戦う仲間の強さも見たいしな」

幽助に関しては、

「待つてましたアアアアアア！ 全力で戦うぜ！！」

やる気満々であった。

「くっそお〜！ 早く明日になんねえかなあ〜！！！」

それを聞いた死神メンバー、ボンゴレメンバー、六課メンバーは若干引くが、シグナムだけは闘争心を見せていた。

因みに銀時はというと、

「え〜、模擬戦？ 嫌だあ〜」

ヤル気無しであったが、

「模擬戦参加してくれたら、チョコレートパフェを一日三食ご馳走するわ」

「よっしやああああああ！ 行くぜコノヤロオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

見事に閃可の口車に乗せられてしまった。

「……………」

これには全員が苦笑したが、新八が小さく呟いた。

「単純だな」

第十八話：魔導師とマフィアと死神との出会い（後書き）

次回・W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士

遂に、模擬戦開始！

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士（前書き）

模擬戦が始まります

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士

翌朝、朝食を済ませたメンバーは、真之介と閃可のいるモニタールームに向かった。

「それじゃあ、模擬戦の組み合わせを行おうと思う」

真之介がそう言うと、閃可がメモを読み上げる。

「第一回戦、左翔太郎 & フィリップ VS シグナム & アギト」

「え、イキナリかよ!？」

「ほう、面白くなってきたな」

驚く翔太郎とは対照的にシグナムは嬉しそうに笑う。

因みにアギトはというと、

「誰か、コイツを何とかしろアアアアア」

「魔導師というのは、こんな小さい者までいるのか!? とても興味深い!」

フィリップの好奇心の標的にされていた。

そんな二組を構わず、閃可はメモを読む。

「第二回戦、アクセアレータ一方通行VS阿散井恋次」

「ヨッシャアアアアア！」

「……………」

ヤル気満々の恋次とは違い、アクセアレータ冷静な一方通行。

「第三回戦、浜面仕上VS獄寺隼人」

「な！？俺がこんなジャージ野郎と！？」

「おい、ジャージ野郎は余計だ」

罵る獄寺に、ツッコミを入れる浜面。

「まずはこの三組から模擬戦を始める」

こうして、三組がそれぞれのフィールドに立ったのであった。

砂のフィールドでは…翔太郎とシグナム、そしてアギトがいた。

「左、フィリップが見当たらないぞ？」

フィリップがいないと気付くシグナムに翔太郎はこう言った。

「準備が要るから自分の分まで戦ってくれってよ」

そう言つて翔太郎はジョーカーメモリをロストドライバーのスロットに挿入し、横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

仮面ライダージョーカーに変身し、戦闘態勢に入る。

「アギトは待機してくれ。まずは一対一サシで勝負したい」

「分かったよ」

そう言つてシグナムは、レヴァンティンを構える。

「左翔太郎……及び仮面ライダージョーカー、行くぜ！」

「ヴォルケンリッター烈火の将・剣の騎士シグナム、参る！」

遂に二人に戦いが始まったのであった。

ジョーカーは走ると同時に飛び蹴りを叩き込む。

「ハア！」

しかしシグナムはそれをかわし、剣を振るいだす。

「おっと！」

無論ジョーカーも回避した。

「スゲエな。美人だと思って油断するところだったぜ」

「甘く見ているぞ左」

拳と刃が高速でぶつかり合う。

「ウオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアア！」

一端引いた二人であったが、シグナムが先手を取ったのであった。

「喰らえ、シユランゲフォーム連結形態！」

形状が恋次の斬魄刀・蛇尾丸と同じ蛇腹剣のように変わり、それを見たジョーカーが驚く。

「ちょッ！？ 武器の変形なんてありかよ！？ つーかそれ、ホントに剣か！？」

鞭のように襲い掛かるレヴァンティンに、ジョーカーは悪戦苦闘する。

モニターでその様子を見ていた一護。

「まるで恋次の女版じゃねえか」

「いや、シグナム殿は恋次より頭は良いほうだぞ？」

一護の台詞にルキアはツツコミを入れた。

「いや、その言い方恋次さんが可哀想なんですけど」

今度はルキアの台詞に新八がツツコミを入れたのであった。

「仕方ねえ、だったらこれだ」

ジョーカーはそう言ってメモリを取り出し、右腰のマキシマムスロツトに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、ジョーカーの右手から紫色のエネルギーが纏う。

「ん?」

一度レヴァンティンを通常形態に戻したシグナムであったが、

「ライダーパンチ！」

突進して来たジョーカーのパンチをすぐさまガードした。

「オラァ！」

「グアァ！」

しかし、パンチの反動で吹き飛ばされてしまう。

「どうだ、これがジョーカーの能力だ」チカラ

ジョーカーの言葉にシグナムは笑いながら答える。

「面白い、不本意ではあるが使わせて貰うぞ。アギト！」

「おうよー！」

次の瞬間、シグナムとアギトは融合ユニオンを発動した。

「あれが……」

閃可から魔導師達のこととは聞かされたジョーカーでも、生で見るので驚いていた。

融合ユニオンにより、雰囲気が変わったシグナム。

「行くぞ、カートリッジ・オン！」

その瞬間、レヴァンティンの刀身から炎が纏う。

「ヤベッ！」

すぐさまジョーカーは必殺技を発動させる。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

右足に紫色のエネルギーが纏っているのを見たシグナムは、

「今度はキックか。行くぞ！」

ジョーカーに向かって接近してきた。

「ライダーキック！」

「紫電一閃！」

互いの必殺技をぶつかり合う。

「グアア！」

しかし、吹き飛んだのはジョーカーのみであった。

「流石に、強えな」

「まあな。それより左、そろそろフィリップを呼んだほうが良いぞ？ これはタッグ戦でもあるからな」

「……良いぜ。　だけど、後悔はするなよ」

シグナムの台詞を聞いて、ジョーカーは変身を解いたのである。

「何!？」

これにはシグナムも驚きを隠せない。

『おい、どう言つつもりだよ！　変身を解くなんて!？』

アギトの言葉にシグナムも同意であったが、翔太郎は不適な笑みを浮かべながらこう言った。

「安心しろ、取って置きを見せてやるからな」

「とっておきだと!？」

「ああ、悪いがこの勝負は貰うぜ。　俺が……いや、俺達がな」

そう言つて翔太郎はロストドライバーの左側にスロットが追加されたようデザインのベルトを装着し、ジョーカーメモリを構えた。

【JOKER】

「行くぜ、フィリップ」

そしてその場に居ないはずのフィリップにそう言った。

モニタールームのフィリップも翔太郎と同じデザインのベルトを付けていて、緑色のメモリを構える。

【CYCLONE】

そして二人は、そのまま叫んだ。

「「変身!」」

フィリップは右スロットにメモリを差し込むと、突如倒れてしまう。

「え!?!」

「フィリップ!?!」

驚く一同であるが、亜紀子と照井はそれを見て動じなかった。

ただ、照井がこう呟いただけであった。

「「よっやくか」」

翔太郎はベルトの右スロットに転送されたフィリップのメモリを奥に差し込むと、ジョーカーメモリを左スロットに差し込み、それをアルファベットのWのように横に倒した。

【CYCLONE・JOKER】

その瞬間、突風が巻き起こり、翔太郎姿が徐々に変わりだした。

「!?!」

シグナムは、その姿に驚きを隠せなかった。

そこに居たのは、右半身が緑で左半身が黒のジョーカーに酷似した仮面ライダーであった。

「右半身が、緑のジョーカー!?!」

するとその戦士はフィリップの声で答えた。

「違うよ。これはジョーカーではない」

「そう。俺達は……」

「二人で一人の仮面ライダー、^{ダブル}W!」

遂に、風の切り札が光臨したのだった。

第十九話：W対烈火の将／黒い切り札対剣の騎士（後書き）

次回、W対烈火の将／風の切り札

（メンバー紹介1）

BLEACH：一護、ルキア、織姫、石田、茶渡、恋次、日番谷

リリカルなのは：なのは、フェイト、はやて、スバル、ティアナ、
キャロ、エリオ、シグナム、ヴィータ、アギト、ノーヴェ

リポーン：ツナ、リポーン、獄寺、山本、クローム、良平、京子、
ハル、ランボ、雲雀

銀魂：銀時、新八、神楽、近藤、土方、沖田

第二十話：W対烈火の将／風の切り札（前書き）

W参上！ 反撃の時！！

リン

「というか、私も忘れないで欲しいです！」

第二十話：W対烈火の将ノ風の切り札

翔太郎とフィリップ：二人が変身する戦士・仮面ライダーW。

その力が今、発揮されるのであった。

「さあ、お前の罪を数えろ！」

W対烈火の将ノ風の切り札

Wの言葉を聞いて、シグナムはふと笑う。

「罪を数える」か……確かに私は過去に大きな罪を背負っている」
それを聞いたWは驚いてしまう。

「いや……ついノリで言っただけなんだけど………」

「まあ、人には誰にも言えない過去の事情ってものがあるからね」

翔太郎とフィリップはそう言って戦闘態勢に入り、

「それじゃ、行くぜシグナム！」

そしてWは、シグナムに突進してきた。

同時に、赤いガイアメモリを右のサイクロンメモリと取り替え、右半身が赤に変わる。

【HEAT・JOKER】

「右半身が赤に変わった!？」

驚くシグナムであったが、すぐさまWの左手からのパンチを防御する。

「掛かったね！」

フィリップがそう言うと、Wの右手から炎が出現し、シグナムの懐に一撃を与える。

「オラア！」

「ガア！」

攻撃を受けたシグナムは、防御を崩してしまい、

「オラオラア！」

同時にWのパンチが炸裂し、シグナムは吹き飛んでしまう。

モニタールームでWの戦いを見た六課メンバー。

「シグナムと同じ、炎の能力を！？」

フェイトはWの右手から炎が出現したことに驚きを隠せなかった。

「でもあのジョーカー、右半身が緑だったのに何で赤に！？」

スバルは疑問を感じたが、亜紀子が答えた。

「あれはWって言って、ジョーカーじゃないの」

「え？ ジョーカーとどう違うんですか？」

ティアナの質問に亜紀子が再び答える。

「メモリが一本だとそのメモリの能力しか発揮できないんだけど、Wはガイアメモリを二本使う事でその力を同時にすることが出来るの」

「そう言えば、フィリップさんはさっきから気絶してますけど、大丈夫なんですか？」

エリオの問いに照井が答える。

「Wは本来、ドライバーの装着者が二人いないと変身ができない。

変身の際は一人の意識がもう一人の身体に転送される。キミ等の言葉で言う融合ユニオンに近いと行って良いだろうな」

それを聞いて六課メンバーを驚きを隠せなかった。

「それじゃ、今の二人は融合ユニオンして戦ってるって事ですか！？」

「マジかよ！？」

なのははWの変身を聞いて驚き、ヴィータは信じられない顔をしていた。

炎を纏った拳を見て、シグナムは驚いてしまう。

「バカな！ 炎の能力だ！？」

『シグナム、ここは空中から攻撃だ！』

「よし！」

アギトの指示で、シグナムは空中へと飛ぶが、

「逃がさねえぜ！」

【LUNAR・JOKER】

Wは黄色のメモリを赤のヒートメモリから変えると、右半身を黄色に替わり、右腕をゴムのように伸ばした。

「な！？ 腕が伸びるだ！？」

「オラア！」

驚くシグナムであつたが、足を掴まれてしまい、そのまま地面に叩き付けられてしまう。

「グアッ！」

腕を戻したWは、今度は銀のメモリをジョーカーメモリから取り替えた。

【LUNAR・METAL】

左半身が銀に変わり、背中には棍棒型専用・メタルシャフトが付加されていた。

これを見た銀時と神楽は興奮していた。

「腕が伸びたアルううううう！？」

「ルイか！？ ルイなのかアイツは！？」

「いや、何でだよ！ ルイなら身体全体が伸びるでしょっが！！」

「じゃあ、半分コルイだ！」

「そうアル！ 半分ゴム人間ネ」

「お前等一端それから離れろ！」

そんな二人に新八はツツコミを入れた。

再び変わったWを見て、シグナムは立ち上がった。

「クツ！ シユランゲフォルム 連結形態！！」

シグナムは変形したレヴェンティンを鞭のように振るうが、Wもメ

タルシャフトを手に取り鞭のように振るった。

ガキーンという音と共に弾かれるレヴェンティンとメタルシャフト。

「どンドン行くぜ！」

【CYCLONE・METAL】

今度は右半身を緑に替え、風を纏ったメタルシャフトでレヴェンティンを弾く。

「今度は風だと!？」

驚きを隠せないシグナムであったが、Wは止まる事を知らない。

【CYCLONE・TRIGGER】

「ハア！」

左半身が青に変わり、銃型の専用武器・トリガーマグナムを手にとったWは風の弾丸が連射させ、それを弾くシグナム。

「クッ！」

「まだまだ行くぜ！」

【HEAT・TRIGGER】

今度は右半身が赤になり、銃口から炎の弾丸を放つ。

「オラア！」

「同じ手は効かんぞ！
シュランゲフォルム連結形態！！」

そうやってシグナムは、空中へと飛びながらレヴェンティンを変形させる。

「うっしや、コイツでどうだ？」

【LUNAR・TRIGGER】

今度は右半身が黄色に変わり、弾丸を放つ。

「そんなもの、弾き落とすまでだ！」

高速でレヴェンティンを振るうが、まさにその時であった。

「なに！？」

弾丸は軌道を変えながらシグナムの肩や足を狙う。

「ぐあー！」

攻撃を受けたシグナムは、すぐさま姿勢を立て直しながら地面に着地する。

【HEAT・METAL】

ソレと同時にWは右半身を赤に、左半身を銀に変える。

「ハア！」

「ハッ！」

再び武器と武器のぶつかり合いであったが、Wは炎を纏った右手の拳で殴り付けた。

「オラア！」

「ガア！」

攻撃がヒットしたシグナムは、殴られた腹部を押さえながら一端距離を置いた。

「決めるよ、翔太郎！」

「ああ、最後はコイツで決めるぜ！」

【CYCLONE・JOKER】

そして右半身が緑で左半身が黒のサイクロンジョーカーに戻ったWは、ジョーカーメモリを右腰のマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

その瞬間、竜巻が出現する同時にWが宙に浮かび、そのままドロップキックを放つ。

「ジョーカーエクストリーム！」

するとWの半身は上下に切り離された状態でキックを叩き込んだ。

「『グアアアアアア！』」

Wの必殺技・ジョーカーエクストリームが見事に決まり、シグナムとアギトも強制的に融合ユニゾンが解けてしまう。

「大丈夫か？」

手を差し伸べるWにシグナムはその手を掴む。

「ああ、なかなか良い勝負だった」

模擬戦第一戦目、勝者は翔太郎 & amp・フィリップこと仮面ライダーW。

第二十話：W対烈火の将／風の切り札（後書き）

次回、最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

メンバー紹介2

ぬらりひよんの孫：リクオ、氷麗つらら、青田坊、黒田坊、首無、毛倡妓、
河童、猩影、イタク、淡島、雨造、ゆら

とある魔術の禁書目録：上条、インデックス、御坂、アクセラレータ一方通行、浜
面、滝壺、打ち止め（ラストオーダー）、ミサカワリスト番外固体、ステイル、神
裂、五和、土御門

幽遊 白書：幽助、桑原、蔵馬、飛影、ぼたん

仮面ライダーW：翔太郎、フィリップ、照井、亜紀子

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜（前書き）

一方通行と浜面の活躍を大幅にします。

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

第二回戦の街のフィールドでは、一方通行と恋次が見合っていた。アクセラレータ

「んじゃ、とつとと始めるぜ。準備は良いよな？」

「はア……良いから早くしろ」

「ハッ、上等じゃねえか！」

こうして、第二回戦が始まるうとしていた。

最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜

第三回戦の岩のフィールドでは、浜面と獄寺が慎重に構えていた。

「(クソ、どうすりゃ良いんだ)」

考えながら獄寺を見る浜面であったが、

「来ねえのか？」

「……………」

「来ねえなら、コッチから行くぜ！」

そう言つて獄寺は、懐に入れていたダイナマイトを着火させる。

「な!?!」

「果てる!」

浜面はすぐさまダイナマイトが爆発する前に逃げようとしたが、

「逃がすかよ!」

獄寺がダイナマイトを投げ飛ばす。

「二倍ボム！」

さらにその倍のダイナマイトを投げ、

「三倍ボム！」

紙飛行機に乗せたダイナマイトを飛ばした。

「これで終わりだ！ ロケットボム！」

「ヤベッ！」

ドガアアアンという音と共にダイナマイトが爆発した。

モニターでその様子を見ていた一同。

「あの浜面って奴……ある意味で大丈夫だよな？」

「分からん。 獄寺も必要以上に攻めてきたからな」

「護とルキアがそう言つと、閃可はこう言った。

「多分、大丈夫かもよ」

「「え？」」

煙りが晴れると同時に、獄寺はあるモノを見た。

「何……だと!？」

それは、服が焦げているが、軽傷で済んでいる浜面の姿があった。

「咄嗟にテメエが投げた方向とは全く逆の方向に跳んで良かったぜ」

実は浜面は、獄寺が前方から投げるとは逆の方向に跳んで爆発を免れていたのである。

「だったらコレだ!」

そう言つて獄寺は右腕に装着している髑髏にダイナマイトを入れ、その顔部分を浜面に向ける。

「果てる、赤の矢……フレイムアロー！」

赤い炎が矢のように発射され、浜面はそれを回避した。

「逃がすかよ！」

獄寺はフレイムアローを何発も撃ち込むが、浜面もそれを回避する。

「テムエ！」

怒る獄寺に浜面はこう言った。

「そんな豆鉄砲じゃ俺はやられねえよ」

「何だと？」

「聞いてるぜ。テムエにはGの弓矢アーチエリーって切り札があるらしいな。見せてみるよ」

「バカかテムエは？俺が本気を出せば、テムエは大恥かくことになるんだぜ？」

獄寺が挑発しようとするが、

「怖えんだろ？そう言っただけにやられんのが」

「ああ！？」

浜面の発言に怒りが頂点に達した。

「後悔すんなよ！ 瓜、カンヒフォルマ形態変化だ」

獄寺は嵐猫の瓜とフレイムアローが一体化した武器・Gの弓矢をアーチェリー発動した。

「やっと来たか」

そう言っつて浜面も銃を構えた。

一方、街のフィールドで戦っている恋次であったが…

「咆えろ、蛇尾丸！！」

斬魄刀・蛇尾丸の刃がアクセアラータ一方通行に効かなかったのだ。

「クソッ、どうなってやがる！！」

さまざまな敵を相手にした恋次でも、アクセアラレータ一方通行のような相手は始めてのケースであった。

「杖持つてるって事は、あまり動くことが出来ねえんじゃねえのかよ!?!」

「はア……哀れだなアお前は。本気で言ってるなら抱きしめてやりたい程の哀れだわア」

「何だと?」

するとアクセアラレータ一方通行は、自分の事について簡単に説明した。

「良い事を教えてやる。俺は嘗て、ある事情で脳にダメージを負った…今では演算も外部に任せきりで戦闘も三十分しか能力が使えない身だ。だがなア……」

グシャリと笑ったアクセアラレータ一方通行は、余裕を見せながらこう言った。

「俺に弱点があるからって言って、別にお前が勝てるってワケじゃ、ねエだろオがよオ! あア!?!」

その瞬間、アクセアラレータ一方通行が足で踏み付けたと同時にアスファルトの地面に亀裂が入り地盤が崩壊した。

「な!?!」

驚く恋次は、すぐさま瞬歩で回避しながら移動するが、

「それが瞬步つて奴かア？ 全然遅エなア！」

アクセアラレータ
一方通行は背中に四つの竜巻を接続して恋次に近づいてきた。

「ウソだろ！？」

驚く恋次は、さらに加速を上げたが、アクセアラレータ
一方通行はそれに喰らい付いていた。

それも、余裕をみせながら。

モニターで様子を見ていたボンゴレメンバーは、驚きを隠せなかった。
つた。

「あのアクセアラレータ一方通行つて人、恋次さんのスピードに喰らいついてる！？」

ツナが驚きでそれ以外の言葉を失くすが、真之介が更にこう言った。

「当たり前だ。一方通行はアクセラレータその気になれば、ジェット機と追いか
けっこが出来るんだ。恋次の瞬歩に喰らいつく何ぞ、ガキの鬼ご
っこと同じだ」

それを聞いたボンゴレメンバーは驚きを隠せず、死神メンバーも驚
きを隠せなかった。

「ジェット機と追いかけてっつて!?!」

「本当に……彼は人間か!?!」

「(クソ、化物かよアイツは!?! 俺の瞬歩に喰らい付く何ぞ初め
てだぞ!?!)」

驚きの余り、対策が練れない恋次であったが、

「鬼ごっこは終わりだア!」

そう言つて一方通行は恋次の真横に居た。

「な!？」

驚く恋次に気にも留めず、一方通行は顔面を鷲掴みし、そのまま彼を投げ飛ばした。

「オラア！」

「グアアアアア！」

投げ飛ばされた恋次は、地面に叩き付けられてしまう。

竜巻を解除し、地面に降りた一方通行。

「何だア、こんなモンかア？」

「ハア……ハア……ハア……」

「そろそろ本気出せよ。聞いてるぜ、テメエ等死神には“卍解”
つて切り札があるらしいな？」

「!？」

「見せろよ、お前の本気を」

それを聞いた恋次は、立ち上がって刀を構えた。

「良いぜ、後悔すんなよ……」

「そのつもりだ」

「なら行くぜ……卍・解！」

その瞬間、恋次は狒々の毛皮を羽織った巨大な蛇の骨のような武器を手に持っていた。

「狒々王蛇尾丸！」

遂に、^{アクセアラータ}一方通行と恋次、浜面と獄寺の本気の戦いが始まる。

第二十一話・最強と脇役その1〜狒々王と嵐〜（後書き）

次回、最強と脇役その2〜翼と捨て身〜

第二十二話・最強と脇役その2〜翼と捨て身〜(前書き)

激突に結末が！

第二十二話・最強と脇役その2と翼と捨て身

卍解・狒々王蛇尾丸を解放した恋次。

「ウラアアアアアアアアア！」

Gの弓矢を発動させた獄寺。

「果てる！」

遂に、一方通行アクセアレータと浜面仕上の戦いに決着がつく。

最強と脇役その2と翼と捨て身

「恋次の奴、何も正解を使うこたあねえと思っけどよ」

モニタールームで、その様子を見ていた一護がそう言うが、

「それだけ彼が強いつて事だろ？ キミも注意した方が良くと思うぞ」

「う……」

石田に言われてしまい、気まづくなってしまう一護であった。

街のフィールド…そこでは恋次と一方通行アクセアレータが戦っていた。

狒々王蛇尾丸を鞭の如く振り回す恋次。

「そらそらそらアアアア！」

しかし一方通行は、それを尽くかわす。

そして、脚力のベクトルを操り、真っ向から突進する。

「うらアあああああああ！」

そして狒々王蛇尾丸の頭部の部分を思い切り蹴り飛ばす。

「クソッ！」

すぐに恋次は体勢を立て直した。

「ヤロウ………だったら！」

すると恋次は、狒々王蛇尾丸を叩き付けながら周囲を破壊する。

「!?!」

驚く一方通行アクセアラレータの隙を狙い、彼の胸倉を掴む。

「クソッ！ 離しやがれ！」

「いくらテメエでも、流石にこの零距离から喰らったら……流石にキツイだろうがよ」

抵抗する一方通行アクセアラレータに、

「破道の三十一・赤火砲」

恋次は死神の技の一つ・鬼道を放った。

一方の岩のフィールドでは、浜面にGの弓矢を向ける獄寺が必殺技を放つ。

「竜巻の赤い矢……トルネードフレイムアロー！」

巨大な炎が放たれ、浜面はそれをかわした。

「クソッ！」

銃を向け、引き金を放つ浜面。

「喰らうかよ！ ガトリングアロー！！」

すると獄寺は、雲属性の死ぬ気の炎を合わせたトルネードアローを放つ。

「グアアアアアアア！」

かわせることが出来なかった浜面は、その場で喰らってしまつ。

「獄寺君も恋次さんも形勢逆転したみたいだね」

「ああ、確かに一方通行アクセラレータも浜面も強かったかが、相手が悪かったみてえだな」

ツナと一護がそう言うと、先に模擬戦から上がった翔太郎とシグナムとアギトが来た。

「勝負の方は？」

シグナムが尋ねると、なのはが答えた。

「獄寺君と恋次さんが逆転したよ」

「そうか……あの二人の強さは分かっていたからな。浜面には悪いが、これは阿散井と獄寺の勝ちだな」

アクセアレータ
一方通行と

しかしリボーンは、映像を観ながらこう言った。

「いや……良く見ておいた方が良さぞ」

それを聞いて、一護とツナはキョトンとした。

服が黒焦げの一方通行アクセアラレータであったが、

「……………」

一瞬で雰囲気が変わった。

「（何だ？）」

異様な雰囲気恋次は動揺を隠せなかったが、

「う……………」

突如として、一方通行アクセアラレータの背中から、

「うおおおおおおおおおおおー！」

『翼』が出現した。

まるで噴出のように出現し、殺気を具現化させたように黒く、『闇』のように黒く、そして悪魔のように黒い翼であった。

「な!?!」

これには恋次も驚きを隠せなかった。

「……………行くぜ」

一方通行アクセアラレータがそう言った瞬間、翼を思いっきり叩き付けた。

ドゴオオオンという音と共に地面が裂け、恋次はすぐさまそこから脱出する。

「クソツ！ 何だあの翼は！？ 聞いてねえぞ！！」

すぐに恋次は、狒々王蛇尾丸を構え、口部分から霊圧の砲撃を発射した。

「喰らえ！ 狒骨大砲！！」

ドガアアアンと一方通行アクセアラータに放たれた狒骨大砲。

「ハア…………ハア…………流石にこの技を直撃で喰らったら、無事じゃ済まねえはずだ…………」

しかし、恋次の予想は大きく違った。

「な！？」

煙が晴れると同時に、驚きを隠せなくなった恋次。

そこに居たのは、墨のような漆黑から雪のように純白の翼と頭上に同色の輪が付いていた一方通行アクセアラータがいた。

その姿はまるで優しさを具現化させたように白く、彼の精神的成長を表すかのように白く、そして天使のような白い翼であった。

「う……………そ……………だろっ！？」

これを見た時、恋次の長年の勘がこう呟いていた。

“絶対に勝てない”と。

「う……ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

冷静さを完全に失った恋次は狒々王蛇尾丸を叩き込むが、

「悪いな……」

アクセアラータ
一方通行は翼を百枚に増幅させ、

「こっから先は、一方通行だ」

その翼で狒々王蛇尾丸を破壊しながら、恋次を叩き込んだ。

岩のフィールドでは、獄寺の攻撃を受けていたはずの浜面が立ち上がった。

「テメエ……いい加減に果てやがれ！」

そう言つて獄寺はガトリングアローを放った。

「ガトリングアロー！」

発射された複数のフレイムアロー。

「……………」

しかし浜面は、沈黙のままであつた。

「ハッ！ 流石に立ってるのが精一杯みてえだな！ まあ無理もねえな。教えておくれぜジャージ野郎、雲属性を使った俺のフレイムアローの連射弾数は百発だ。いくらテメエでも、流石にこの数はかわしきれねえハズ」

勝ち誇るように笑う獄寺であつたが、

「ウオオオオオオオオオオオ！」

突如、叫びを上げた浜面が突進してきた。

浜面は攻撃を受けながらも、走ることを止めなかった。

「テメツ、どういうことだ!？」

驚く獄寺に浜面はこう言つた。

「テメエは性格のワリに結構慎重派だからよ、絶対隠し玉を持って

ると思つてたぜ！」

「何言つて」

「連射系の飛び道具つて見た目は強そうだけどよ、一発一発の破壊力は低いつて相場が決まつてんだよ！ だからテメエがそういうタイプの攻撃を仕掛けてくるのを待つてたんだよ！ しかも連射系つて攻撃の最中に隙が出来るんだよ！！！」

「な！？」

そう、浜面はこうなる事を待つていたのだ。

獄寺の本当の隙が出来る瞬間を。

「行くぜ！」

銃口を向け、引き金を引く。

特殊なゴム弾と言えどダメージは高いため、バンバンバンと獄寺に命中する。

「ガッ！」

その隙を見逃さなかつた浜面は、

「ウオオオオオオオオオ！」

右手の拳を強く握りながら、

「終わりだアアアアアア！」

その拳で獄寺を思いつきり殴り付けた。

「グアツ！」

獄寺は地面に倒れ、立ち上がるうとするが、

「させるかよ」

浜面が再び弾丸を放ち、彼の間接部を正確に狙った。

「な!？」

「ウオオオオオオオオ！」

驚く獄寺であったが、浜面はそのまま頭突きを叩き込んだ。

「が……………」

「ハア……………ハア……………ハア……………」

この瞬間、アクセアラレータ一方通行と浜面は、重なるように恋次と獄寺にこう言
った。

「悪いな……」

「悪いな……」

「これが悪党（脇役）の戦いだ」

そう言っアクセアラレータて一方通行は縮めていた杖を元の長さに伸ばし、浜面は銃
をポケットに仕舞った。

第二十二話・最強と脇役その2〜翼と捨て身〜(後書き)

次回、浦飯チームの実力

桑原、蔵馬、飛影の戦いが遂に！

第二十三話：根性一直線！（前書き）

桑原が遂に活躍する！

第二十三話：根性一直線！

最初の模擬戦が終わり、閃可は再びメモを読む。

「よし。それじゃ、続けるわよ。第四試合・桑原和真VSヴィータ」

「うっしゃー！俺の出番だぜ！！」

「あたしか……」

遂に戦えると知って、桑原はヤル気満々になる。

逆にヴィータは落ち着いていた。

「第五試合・蔵馬VS石田雨竜」

「……」

落ち着いた表情で互いに相手を見る蔵馬と石田。

「第六試合・飛影VS日番谷冬獅朗」

「……」

飛影と日番谷も、互いに相手を見ていた。

根性一直線！

第四試合・炎のフィールドでは、桑原とヴィータが立っていた。

「うっしやあー！ んじゃ、全力で行かせて貰うぜ！」

「ああ、掛かって来い！」

すると桑原は、文字どおり突進してきた。

「うおりやあああああああ！」

拳を突き出すが、ヴィータはそれをかわし、デバイス・グラーフアイゼンを彼の頭部に目掛けて振り下ろす。

「おらあああああ！」

ドガツという音と共に、桑原は吹き飛ばされてしまう。

「ガア！」

「へへ……どうだ」

『鉄槌の騎士』の異名を持つ彼女にとって、桑原に攻撃を当てるなど動作もないことであった。

モニタールームでそれを見ていた一同。

「桑原と言ったな。あやつ、ヴィータ殿を女だと思って油断しすぎではないか？」

ルキアがそう言いながら腕を組むが、閃可はハッキリこう言った。

「いいえ、油断するのはヴィータの方よ」

「え、どうして？」

なのはの問いに真之介はこう言った。

「試合を観れば分かる」

鎚を構えながら、警戒を怠らないヴィータ。

「（非殺傷にしてるとはいえ、あたしのアイゼンの攻撃を喰らって立ち上がれ奴は）」

“いない”と考えていたが、彼女の考えは一気に碎かれる。

「いつてえ〜」

「な!?!」

頭を殴られて、普通に立ち上がった桑原。

頭からは出血がただけは、普通の状態であった。

「女だと思って油断してたぜ。こりゃ用心して掛かんねえとな…

……」

そう言つてムクリと立ち上がった桑原の打たれ強さにヴィータは驚きを隠せなかった。

「おいおい冗談だろ? 一応気絶する威力で殴つただけだ!?!」

「悪いな、中学の頃から浦飯に喧嘩を売ってたんでな、アイツのパンチや蹴りに比べりゃ大したことねえぜ」

桑原はそう言つと、右手に靈力を集中させた。

「行くぜ……霊けええええええん!」

その瞬間、靈力によって一本の剣が出現した。

これこそが、桑原の十八番の能力・靈剣である。

「浦飯チーム・桑原和真だ。男気を見せてやるぜ!！」

「やってみろ! このヴォルケンリッター鉄槌の騎士・ヴィータが吹っ飛ばしてやる!！」

「そんな……ヴィータちゃんの攻撃が効かない!？」

ヴィータと戦った経験があるのはにとって、それは驚きを隠せない状況であった。

無論、他の六課メンバーでもある。

「霊力を具現化させるなんて……アイツは一体?」

「つか、ハンマーで頭を殴られて普通に立ち上がるってどっいう神経してんだ!？」

「いや、それ以前に……」

霊力を剣に変える桑原の能力に驚く茶渡とその打たれ強さに驚く一護であったが、

「ヴィータ殿の鉄槌が大した事無いと言っただけ……
こやつの一撃の威力がもの凄く気になるぞ」

「ん？」

幽助を見ながら、彼の一撃の威力が気になってしまいうルキアであった。

「うりやあああああああ！」

霊剣を構え、走り出す桑原。

「同じ手が通用するかよ！」

ヴィータがそう言って鎚を振り下ろすが、

「二刀流！」

桑原は、左手から霊剣を出しながら攻撃する。

「な！？」

驚いたヴィータは、すぐさま回避したが、肩を斬られてしまい、その傷から血が流れ出した。

「クソッ！」

「悪いな。この霊剣は俺の霊力で作り出してんだ、二刀流も可能なんでな」

「だったらこうだ！」

そう言ってヴィータは、グラーファイゼンを形態変化させた。

「ギガントフォーム！」

その瞬間、アイゼンの形状が巨大な鉄槌に変わった。

「ぶつち抜けエエエエエエエエエ！」

「な！？ ドワアアアアアアアアアアア！」

これには桑原も吹き飛ばされてしまう。

「これなら、流石の桑原も気絶してしまうな」

「いや、そのまえに重傷になるんじゃない………」

シグナムの一言に新八は即座にツツコミを入れた。

「いゝや、まだ終わってないぜ」

真之介がそう言いながらモニターを観ていた。

「ハア……ハア……ハア……どうだ」

ヴィータはそう言って構えを取るが、

「まだ……まだ……俺はやれるぜ」

桑原は再び立ち上がった。

「オイオイ、今度こそマジかよ!？」

自慢の鉄槌による一撃を喰らって立ち上がる桑原に、ヴィータは恐怖ですら感じ取った。

「お前本当に人間かよ！ 普通の奴なら気絶しても可笑しくねえぞ
!！」

「へへへ……俺にも一つ、自慢があつてな……」

そう言って桑原は、霊剣を構えながら叫んだ。

「根性の勝負では、誰にも負けたこたあねえんだよ！ 剣よ、ヴィータに向かって伸びよ!！」

すると刀身が、槍のように一気に伸び始めた。

それもヴィータに目掛けて。

「なに!?!」

これには流石のヴィータも逃げるしかなかった。

「(くそ、追撃技かよ! 逃げ切れねえ!!)」

「ホントにアイツはナニモンだ!?!」

「あの打たれ強さは人間ではないぞ!?!」

一護とルキアは、桑原の打たれ強さに驚きを隠せなかった。

無論、他のメンバーも同じであった。

「しかし桑原君とヴィータちゃんじゃ、キャリアの差が違うんじゃない?」

屋敷の主、ハイゼンハウワーの言葉に閃可はこう言った。

「確かに、ヴィータの方は戦闘経験が豊富よ。でも、所詮はガジエットや魔力を持った人間。ただ桑原は、幽助や蔵馬と一緒に妖怪との戦いに足を踏み入れているよ。彼から見たらヴィータの鉄槌は屁の河童同然ね」

追撃する霊剣の刀身に追いかけてられているヴィータ。

「(クソッ！ こうなったら……………)」

そう思い、ヴィータは桑原に突進していく。

「何だ!？」

「ウオオオオオオオオオオオ！」

霊剣が自分に来る前に、グラーフアイゼンを叩き込むヴィータ。

「霊剣！」

しかし桑原は左手から霊験を出すか、

「そこだ！」

そう言つてヴィータは跳び上がり、

「ぶつち抜けエエエエエエエエエ！」

全力を込めた一撃を桑原の頭部に叩き込んだ。

「グアアアアアアアア！」

攻撃を受けた桑原は、そのまま吹き飛ばされてしまう。

「か……………勝つた……………のか？」

息を切らしながら膝を着いてしまうヴィータ。

しかし、桑原は立ち上がりながら叫んだ。

「冗談じゃねえええええええええええ！俺はまだやれるぞドチクシヨ
オオオオオオオオオオオオオオオ！！！」

これには、流石のヴィータもお手上げであつた。

「冗談じゃねええええええええええええ！こんな打たれ強い奴！今まで初めて見たぞ！！もう私の負けで良いから此処から出せエエエエエ

「エエエエ！！」

模擬戦第四試合は、桑原の異常なまでの打たれ強さに恐怖したヴィータのギブアップ負けであった。

その光景を見ていたメンバーは、顔を引きつってしまふ。

「今のヴィータ殿の一撃は、全力を込めてのモノであったぞ」

「それを喰らって立ち上がる何ぞ……………」

「ある意味、ホロウ虚より厄介だぜ」

上からルキア、恋次、一護の三人がそう言ったのであった。

「あそこまで粘り強い奴が居たとはな……………面白い」

唯一、桑原の強さに戦ってみたいと思ったシグナムであった。

第二十三話：根性一直線！（後書き）

次回、最強の知将

桑原

「って、俺の活躍コレだけ!？」

第二十四話・最強の知将（前書き）

蔵馬VS石田の知恵比べみたいな対決です。

第二十四話・最強の知将

第五試合：草原のステージでは、慎重になる石田とは対照的に全く動じない蔵馬。

策略と智恵に長けた知将对決が、今始まるうとしていた。

「……………」

全く動じず、まるで全てを見透かしたような雰囲気を見せる蔵馬に、石田は同様に隠せなかった。

「（何なんだ彼は……まるで此方の考えがお見通しのような雰囲気だ）」

「どうしましたか？ 慎重なのは良いんですけど、過ぎると臆病に見られますよ？」

ゾクリと蔵馬の言動に石田が背筋を凍らせてしまう。

「（不味い……こっちも言い返さない）」

「ん？」

「そ………そう言うキミも、随分堂々とするじゃないか？ 何なら、キミから来れば良いじゃないか？」

逆に挑発で返す石田。

「そうか………なら、此方から責めましょうか？」

「え？」

その瞬間、蔵馬が動き出した。

一瞬で間合いに入り、上段蹴りを叩き込む蔵馬。

「クッ！」

すぐさま石田は、攻撃を開始する。

しかし蔵馬は攻撃を止めず、連続で攻めに入る。

反撃をしようとした隙を窺う石田であったが、

「無駄だ」

ドガツと蔵馬の蹴りを受けてしまう。

「アイツ…石田の考えを読んでやがる！」

「恐らく相当な修羅場を潜って居るはずだ」

蔵馬の隙の無い動きを観て、一護とシグナムはそう言った。

「でもよ、石田には弓があるじゃねえか？」

恋次がそう言うが、ルキアがこう言った。

「奴が隙を見せてくれればな」

蔵馬の隙の無い攻撃に翻弄され、反撃が出来ない石田。

「ハア……………ハア……………」

「随分と息が上がってきましたね？」

「（甘く見ていた……………このままじゃ、本当にやられる）」

そう考えた石田は、クインシークロス滅却師十字を取り、そこから弓を出現させる。

「……………それが、キミの武器ですか？」

「ああ……………これが僕の霊弓『銀嶺孤雀』だ」

そう言っつて石田は弓を引き、矢を放った。

蔵馬はすぐさま矢をかわす。

「無駄だよ」

石田は飛廉脚で真上に移動し、矢を放った。

「光の雨【ヒュートレーゲン】！」

ドドドドドと放たれる矢の雨。

飛び道具の使い手である石田の弓に逃げられる者はいない。

地面に着地した石田は、煙が晴れるのを待っていた。

「聞こえてるかどうかは分からないと思うが、一応言っておくよ。」

僕は獄寺隼人と違って、頭に血が上りやすい性質じゃないからね」

そう言っつて眼鏡を掛け直す石田であったが、

「成る程、中々面白いものですね」

「!?!」

煙が晴れると同時に、全く無傷の蔵馬が不適な笑みを見せながら立っていた。

それも無傷で。

「ウソ……だろ!？」

「全くの無傷!？」

恋次とルキアが、全くの無傷の蔵馬に驚きを隠せなかった。

「アイツ………一体!？」

一護もなのはもツナも、それに驚きを隠せなかった。

しかしリボンだけは、こう呟いた。

「コイツは、石田の負けだな」

「バ……バカな………」

攻撃が全く通用しない蔵馬に、石田は恐怖を感じてしまった。

「どうした、その程度か？」

口調も変わった蔵馬は、全く動じていなかった。

「（それなら！）」

石田はすぐさま飛廉脚で後ろに回りこんだ。

「いくらキミでも、この零距离からの攻撃は避けられないはず！」

そう言って石田は、矢を放とうとしたその時であった。

「ローズウィップ
薔薇棘鞭刃」

蔵馬の髪から鞭が飛び出し、石田を攻撃した。

「な!?!」

石田は避けられず、攻撃を受けてしまう。

その場で倒れてしまった石田は、驚きを隠せなかった。

「バカな……鞭を……髪で……」

「悪いな、使えるのは手足だけじゃないんだ」

そう言って蔵馬は余裕を見せていた。

第二十四話・最強の知将（後書き）

次回、邪眼師VS死神

第二十五話：邪眼師VS死神（前書き）

飛影VS日番谷

第二十五話：邪眼師VS死神

第六試合：風のフィールドでは、飛影と日番谷の試合が行われていた。

「あの日番谷って奴、飛影の相手になるたあ運が悪いな」

幽助がそう言つと、ぼたんがこつ言つた。

「甘く見ちゃダメだよ。あの子、あれでも隊長やってるらしいから」

「マジかよ!」

「あんなチビなの隊長かよ!」

「あんな小さいのに隊長なの!」

幽助、獄寺、スバルの順で驚くが、獄寺とスバルの言葉にルキアがこつ言つた。

「貴様等、それはヴィータ殿に対する当て付けか?」

それを聞いた二人は、桑原と共に戻ってきたヴィータが怒っている場面を見て、何とかフォローしようとした。

「ところでルキアさん。日番谷さんが隊長をしているというのは、本当ですか?」

「ああ。日番谷隊長は、護廷十三隊で十番隊の隊長を務めるほどの天才だ。恐らく飛影も苦戦するかもな」

それを聞いた幽助は、驚く事もなくこう言った。

「そうか？」

邪眼師VS死神

「十番隊隊長、日番谷冬獅朗だ。言っておくが、手は抜かねえぞ」

「そうしろ、死にたくなければな」

その瞬間日番谷は、凄まじい霊圧を放った。

「……………ほっ」

しかし飛影は全く動じる事も無く、当たり前のように剣を抜いた。

「行くぞ」

そう言って飛影は、日番谷に向かって突進した。

日番谷も剣を抜き、攻撃を防いだ。

ガキーンという音と共に反り合う二人の刃。

「ハア！」

そのまま飛影は剣を振るうが、日番谷は瞬歩で回避して後ろに回りこむ。

「そこだ！」

そう言って剣を振り下ろした瞬間、

「（取った!）」

そう確信したはずであった。

しかし、予想は大きく外れた。

日番谷が斬ったのは飛影ではなく、彼が着ていたコートであった。

「何!?!」

「残像だ!」

そう言っつて飛影は剣を振り下ろした。

「クッ!」

しかし日番谷も攻撃を防ぎ、一端後ろへ引いた。

「何だアレは？ 瞬歩！？」

「いや、いくら瞬歩でも残像を残す程の技術はないはず！？」

「まさか、普通の瞬間移動か！？」

死神メンバーの面々は、飛影のスピードに驚きを隠せなかった。

「ほう、それが『瞬歩』ってやつか？ 案外速いんだな」

「そう言うお前の今の移動は、何て名前だ？」

「名前？ そんなもの無い。あれはただの長所みたいなものだ」

そう言うって飛影は剣を構える。

それを見た日番谷は、決心したような顔でこう言った。

「仕方ねえ。出来れば使いたくはなかったんだが、阿散井も使ったから別に良いか」

映像を観ていた死神メンバーの面々は、ようやくかという顔をしていた。

「蒼天に坐せ」

日番谷が刀を上挙げた瞬間、空が突如曇りだす。

それと同時に日番谷の刀から水と氷が出現し、それは巨大な竜を作り上げた。

「氷輪丸！」

「な、何だよありゃ!？」

グイータの驚きにルキアが答えた。

「天候をも支配し、水と氷の竜を作り出す。日番谷隊長の斬魄刀にして、冰雪系最強を誇る剣・氷輪丸」

「久々だぜ、冬獅朗がアレを使うのは」

一護も本気を出した日番谷に思わず声を出した。

「ウラアアアアアア!」

日番谷は氷輪丸の氷の竜を飛影に向けて飛ばした。

すぐさま回避する飛影であったが、

「(何て水圧だ……かわすことが な!?)」

徐々に凍っていく右腕に驚きを隠せず。

「ウワアアアアアア!」

思わず叫びながら地面に落下していった。

「く……………は……………」

起き上がろうとする飛影であったが、日番谷がすかさず刀を向ける。

「コレまでだな。大人しく負けを認めれば、術は解くぜ」

「うつしやあああああああ！ 流石日番谷隊長！！」

そう言うて恋次は大はしゃぎであるが、

「朽木さん、どうしたの？」

モニターを凝視するルキアに織姫が訪ねだす。

「おかしい……………何だ、この違和感は……………」

ルキアの違和感は、すぐさま当たる事になった。

「どうした？」

尋ねる日番谷であったが、

「れ……………を……………な……………るな」

「ん？」

まさにその瞬間であった。

「俺を……………舐めるなアアアアアアアアアアアア！」

飛影の鉢巻が切れ、額にはには第三の眼が開眼した。

「何！？」

額の眼に驚きを隠せなかった日番谷は、一瞬後退りしてしまう。

その瞬間、飛影の全身から灼熱の炎が放たれ、氷が一瞬で解けたのだった。

全身から炎を放ち、邪眼師・飛影が再起した。

「喜べ日番谷、貴様が死神としての邪王炎殺拳の犠牲者第一号だ！」

ニヤリと笑う飛影が拳から炎が出現し、日番谷に接近した。

「邪王炎殺煉獄焦！」

「！……！」

すぐさまガードする日番谷であったが、

「（な……………何だ、この炎は！尋常じゃないほどの高熱だぞ！？）」

炎の熱量に驚きを隠せない日番谷であったが、

「ハアッ！」

飛影の次の攻撃に頭が回らずに、吹き飛ばされてしまう。

「グアアアアアアア！」

ドガンという音と共に、後ろの丘に吹き飛ばされてしまう。

「フン、いい加減に本気出せ。コッチもムカついてきたぜ！」

そう言って飛影は日番谷に歩み寄った。

「う……ウソだろ!？」

「日番谷隊長が!？」

本気を出した飛影の実力に、死神メンバーが驚きを隠せなかった。

それを見た真之介はこう言った。

「当たり前だろう？ 飛影の実力は、まだこんなモンじゃねえぜ。
アレはまだ数分の一しか発揮してないぜ」

それを聞いた一同は、同様に隠せなかった。

第二十五話：邪眼師VS死神（後書き）

次回、氷竜VS炎龍

第二十六話：氷竜VS炎龍（前書き）

炎VS氷の戦いが始まった。

第二十六話：氷竜VS炎龍

遂に本来の力『邪王炎殺拳』を解放した飛影。

「とつとと本来の力を解放しろ。いい加減にムカついてきたぜ」

そう言つて飛影は構える。

日番谷は、立ち上がりながらも飛影にこう言った。

「ハア……良いぜ……見せてやるよ」

そう言つて全ての霊力を解放した。

「卍……解！」

その瞬間、氷の竜が日番谷と一体化したかのように、彼の身体に出現した。

右手には首を伸ばした竜が刀を啜えたように見え、背中には翼に巨大で長い尾が生え、全てが氷で出来ていた。

「大紅蓮氷輪丸！」

遂に、日番谷が卍解を解放した瞬間であった。

氷竜VS炎龍

モニターでその様子を見ていた一護達。

「冬獅朗のヤツ……遂に正解を！」

「しかしあの飛影というヤツ、まさか炎の使い手であったのか。

日番谷隊長とは全く正反対の能力だ」

氷と炎、全く正反対の能力を武器にする二人の戦いを見て眩くルキア。

「でもよ……卍解を解放したんだからよ、日番谷隊長が勝てんじやねえか？」

恋次がそう言うが、

「いや、勝負はまだ分かんねえぞ」

リボンがそう言ったのであった。

「行くぞ！」

そう言って日番谷が突進して来た。

無論、飛影も接近してくる。

ガキーンという音と共に、刃と刃がぶつかり合う。

「ウオオオオオオオオ！」

「ハアアアアアアア！」

二人は一度後ろへ下がると、再び攻撃を繰り返す。

「群鳥氷柱！」

「邪王炎殺煉獄焦！」

氷の弾丸を放つ日番谷に対し、飛影は炎を纏った拳で対抗する。

「千年氷牢！」

すると日番谷は、氷の牢を作り出して飛影を閉じ込めるが、

「邪王炎殺剣！」

炎を纏った剣で両断された。

「炎のパンチの次は炎の剣だと!？」

「私の『紫電一閃』と同じ技を!？」

「あやつ、何て格闘センスだ!」

一護は飛影の戦いに驚き、シグナムは自身と同じ技に驚き、ルキアは飛影の格闘センスに驚きを隠せなかった。

「そろそろ、潮時かな」

そう言って閃可はモニターを観ていた。

「ハア……………思ったより、やるな」

「お互いにな」

常に限界に達していた日番谷。

対照的に余裕を見せる飛影。

「行くぞ……………竜閃架！」

日番谷は刃を前方に向け、そのまま突進をする。

しかし飛影は、剣を上に向けると、

「ついさっき思い付いた技だ……………よく拝んでおけ……………」

剣を振り下ろすと同時に、紅い龍が飛び出してきた。

「邪王炎殺紅龍波！」

「ゴオオオオオオオオオオ！」

まるで意志を持ったように、紅い炎の龍が日番谷に迫ってきた。

「な！？」

驚く日番谷であったが、すぐさま攻撃をガードした。

「（まるで、氷輪丸……防ぎれな　　）」

しかし炎の威力は、空気中の酸素を燃やしながら膨大に増していた。

「グアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その威力に耐え切れず、日番谷は吹き飛ばされてしまう。

「安心しろ、コレでも威力を抑え込んだ。火傷だけでもまだマシだぜ？」

模擬戦第六試合は、本来の能力『邪王炎殺拳』を解放した飛影の勝利。

第二十六話：氷竜VS炎龍（後書き）

次回、魔導師VS魔術師

フェイトと神裂の試合です。

第二十七話：魔導師VS魔術師（前書き）

似て非なる能力同士の戦い！

第二十七話：魔導師VS魔術師

第七試合…嵐のフィールドでは、神裂とフェイトが立っていた。

魔法と魔術…似て非なる能力を持つ者同士の対決が、今始まる。

魔導師VS魔術師

「フェイト・T・ハオラウンです。

宜しく願いします」

「神裂火織です。お互いに悔いの無い試合を」

そう言つてフェイトはバルディッシュ、神裂は七天七刀を構えた。

「ハアッ！」

最初に動いたのはフェイト。

「（神裂さんのあの長刀は、攻撃に使われたら厄介だね。その前に叩き込む！）」

刀を抜かせまいと神裂に突撃するフェイトであつたが、彼女の予想は大きく外れてしまう。

「七閃」

神裂が抜刀の構えを取つた直後、フィールド上が斬撃を受けたかのように切り裂かれた。

「!?!」

驚いたフェイトは、すぐに攻撃をガードする。

「グッ！（そんな、あの遠距離からの抜刀が!?!）……これが、魔術!?!」

「いえ、これは魔術ではありません。単なる物理攻撃です」

驚くフェイトであつたが、神裂の返答にさらに驚きを隠せなかつた。

「何だ、あの攻撃は!？」

「あんな速い斬撃は、見たことも無い！」

恋次とルキアが驚くが、

「まさか、女性剣士であのような技を持つ者がいるとは……異世界とは本当に凄すぎる！　クツ、一度神裂と試合してみたい」

バトルマニアのシグナムの発言に一同が啞然としていた。

「でも、リボンさん。あんな長い刀で抜刀が出来るんですか！？」

獄寺の問いにリボンは答えた。

「いや、あの攻撃には何か『仕掛け』がある筈だ。　フェイトは、

それに気付かば戦いに余裕が出来るはずだ」

神裂の『七閃』に翻弄されるフェイトであったが、

「（オカシイ……あんな長い刀で高速の抜刀はまず出来ない……きつとカラクリがあるはず……）」

そう思いながら目を凝らして見ると、

「！？」

そこには、神裂の前方を覆いつくす鋼線ワイヤーの結界が張られていた。

「まさか！？」

「お気づきにまりましたね？ その通りです。『七閃』は本来、天草式に伝わる鋼線術から放たれる技」

ですが…と神裂は刀を構えながらこう言った。

「この七天七刀は、飾りではありません。私にはこの刀を使った新説『唯閃』という技があります」

「（悔れない……………）」

神裂火織という強者を前に、フェイトはどういった戦法を取れば良いのか悩むのであった。

「遠距離では鋼線……………しかし近距離では抜刀術の二重戦法……………これはどう見てもフェイト殿が不利だな」

ルキアはそう言いながら、映像を観ていた。

「それにしても、あないな攻撃が出来る人がおったとは、思わんかったな」

はやてもこれには驚きを隠せなかった。

しかし、土御門はふところ思った。

「しかし、あのフェイトって姉ちゃんは空中戦とか出来ないのにかにゃー？　いくらねーちんでも、空中戦は無理ぜよ」

それを聞いた六課メンバーは、確かにという顔をしていた。

「（そうだ！）」

何かを思いついたフェイトは、空中へと飛んだ。

「！！（空襲で来ますか）」

攻撃をすぐさま読み取った神裂は、構えを取りながら警戒する。

「行きます！ プラズマファイアー！！」

周りから発射口が展開され、フェイトの合図と共にプラズマ砲弾が放たれた。

「！！！」

すぐさま神裂は刀を抜いて、プラズマを弾いた。

しかし、フェイトはすぐに後ろを取り、魔力の刃を展開したバルデイッシュを振り下ろした。

「でやあああああああ！」

「クッ！」

ガキーンとぶつかり合う二つの刃。

「ハアッ！」

しかし、神裂に吹き飛ばされてしまいが、すぐさま体勢を立て直したフェイト。

「中々ですね」

「そちらこそ」

するとフェイトは再び空へと舞い上がり、呪文を唱えた。

「アルカス・クルタルス・エイギアス煌めきたる天神よ……今導きの
もと振りきたされ……バルエル……ザルエル・ブラウゼル……」

その瞬間、頭上に魔法陣が展開され、幾度の稲妻の光と雷の轟音が
鳴り響いた。

そしてフェイトは、ベルディッシュを徐々に上に挙げ、再び振り下
ろすと同時にこう言い放った。

「サンダー………ウォール！」

彼女の合図と共に、無数の稲妻が神裂を襲った。

「まさか、あんな切り札を隠し持っていたとは！」

神裂は稲妻をかわしながら走っていくが、

「逃がさない！」

バリアジャケットを通常のインパルスフォームからソニックフォームに切り替えると、バルディッシュを巨大な魔法刃の大剣に変えながら接近してきた。

「しまっ
」

神裂が気付いた時には既に遅かった。

「撃ち抜け、雷神！ ジェットザンバアアアアアアアアアアア！」

そしてフェイトは、神裂に向かって魔法刃を振り下ろした。

「グッ！」

「ハアアアアアアアアアアアアアアアア！」

その瞬間、膨大なエネルギーが大爆発を起こした。

モニターでその様子を見ていたエリオとキャロ。

「フウ……どうやらフェイトさんの勝ちみたいだね」

「そうだね。いくら神裂さんでもフェイトさんの魔法刃を受けて倒れないワケがないから」

そう言って安堵するが、

「いや、まだまだよ」

ステイルが煙草を吸いながらそう言った。

「ハア……ハア……勝った」

フェイトはそう言いながら息を切らすが、

「流石に、この技は効きました」

そう言っつて神裂が立ち上がった

「そんな……」

フェイトは自身の技を受けて、尚立っつていられる神裂の異常なまでのタフさに驚きを隠せなかった。

「出来れば使いたくはありませんでしたが、此方も見せましょう。

本当の『魔術』を」

その瞬間、神裂の魔力と戦闘態勢が変わった。

「Salvereeooo」

自らの魔法名を口に出した神裂。

その意味は、『救われぬ者に救いの手を』。

左右前後上下に『七閃』の鋼線が放たれ、それがフェイトの逃げ場を奪う。

「ウソツ!？」

油断をしたつもりは無かったフェイトであったが、本気を出した神裂を相手に逃げる事が出来なくなってしまう。

その瞬間神裂は、2 mもある刀を構えながら突進し、その刃を鞘から抜いた。

「唯閃！」

シュバーンという音と共に、神裂の必殺技がフェイトに命中した。周囲を切り裂く『七閃』の結界と一撃必殺を決める『唯閃』の抜刀術。

「御安心を、峰打ちです」

「クツ……あ……」

例え峰打ちでも、本気の神裂が放った技はS級超えの魔導師であるフェイトですら敵わなかった。

「まだ、続けますか」

「いえ………私の、負けです」

模擬戦第七試合は、魔法名を解放した神裂の勝利であった。

「フェイトさんが……」

「負けた……」

フェイトが負けた事に、エリオとキャロはショックを隠しきれなかった。

煙草を吸いながらステイルは、

「しかし、神裂を此処まで追い詰めるとは、彼女やるじゃないか」

そう言ってフェイトの実力を評価した。

第二十七話：魔導師VS魔術師（後書き）

次回、赤き加速と牙の切り札

第二十八話：赤き加速と牙の切り札（前書き）

この戦い、ゾクゾクするね。

第二十八話：赤き加速と牙の切り札

模擬戦第八試合目は、フィリップ&mp・照井V Sスバル&a
mp；ノーヴェのタッグ対決であった。

「あの、フィリップさんも戦うんですか？」

スバルの問いにフィリップは答えた。

「僕も、ただ見てるだけは暇だからね」

模擬戦第八試合…炎のフィールドに立つフィリップと照井ペアとスバルとノーヴェペア。

「スバル・ナカジマー等陸尉です。 全力で行きます！」

「ノーヴェ・ナカジマ。 手加減無しで行く」

「フィリップだ。 本名はあるけど、こっちの呼び名が馴染み深いからね」

「風都署超常犯罪捜査課の照井竜だ。 此方も全力で行く」

そうやってスバルとノーヴェは構え、照井はアクセルドライバーを装着した。

予めダブルドライバーにジョーカーメモ리가差し込まれたフィリップは、肩に恐竜型のガジェットを掌に乗せた。

「恐竜のガジェット？」

「何だ、アレ？」

疑問を感じたスバルとノーヴェであったが、フィリップはすぐさまそのガジェットを変形させ、一本のガイアメモリを出現させた。

【ACCEL】

【FANG】

「変身！」

「変……身！」

【ACCEL】

【FANG・JOKER】

照井は赤きボディに青い複眼の戦士・仮面ライダーアクセルに変身した。

そしてフィリップは、右半身が白で左半身が黒、そして触覚・複眼・ボディに猛獣の気高さと牙のような鋭さを思わせる雰囲気の変身した。

『牙の記憶』を宿すファングメモリと『切り札の記憶』を宿すジョーカーメモリによって、フィリップが主体となる『牙の切り札』仮面ライダーW・ファングジョーカーが、此処に光臨した。

「……ハア！」「……」

すぐさま四人は、一斉に激突を開始した。

「WVSスバル」

Wとスバルは、燃え上がる炎の中で激しい戦いを繰り広げていた。

「ヤア！」

スバルが勢い良く殴りかかるが、

「ハッ！」

Wはすぐさま拳を受け止めた。

「んぐぐぐぐ………」

力を入れているつもりが、中々入らない。

「な………何で!？」

「ラア！」

「キヤア！」

すると今度はWに思いっきり吹き飛ばされてしまう。

「クツ！ リボルバー……………シユウウウト！」

右手から繰り出す一撃をWの懐に叩き込んだ。

ドスンという音が鳴り響き、手応えを感じたスバルであったが、

「やるね」

「!?!」

Wはダメージを受けているどころか、全く平然としていた。

実はファングジョーカーは、通常のWとは違って『メモリチェンジ』という汎能性を持たない代わりに驚異的な戦闘力を持つことが出来るのである。

すぐさま体勢を立て直したスバルは、

「ナツクル……………ダスタアアアアア！」

魔力で強化した拳で殴りかかるが、Wはファングメモリの恐竜の頭部にある角部分・タクティカルホーンを右手で一回弾いた。

【ARM FANG】

その瞬間、右手から鋭い刃・アームセイバーが出現し、その刃で攻撃を防いだ。

モニターを見ていた一同は、驚きを隠せなかった。

「ウソだろ、スバルの拳が効かないって!？」

「あんなに強い相手、今まで見たこと無い」

スバルの上司であるのはとヴィータは、スバルを翻弄するWに驚きを隠せなかった。

「最初はアームフングか……」

そう言いながら閃可はモニターを覗いていた。

ファンゲジョーカーの戦闘力に冷汗を掻いたスバルは、ウィングロードで翻弄する作戦に出たが、

「させないよ」

Wはタクティカルホーンを二回弾いた。

【SHOULDER FANG】

右肩に出現した刃・ショルダーセイバーを手に持ち、それをスバルに目掛けて投げ飛ばした。

「ハア！」

ブーメランのように飛んできたショルダーセイバーに驚いたスバルは、

「うわっ！」

すぐさま避けるが、誤って足を滑らせてウィングロードから落ちてしまった。

「いつ痛う〜」

痛がりながらも起き上がるスバルであったが、

「決めるよ、翔太郎」

「ああ、行くぜ！」

Wはタクティカルホーンを三回弾き、

【FANG MAXIMUMDRIVE】

右足に出現した刃・マキシмумセイバーが鋭く光りだす。

「ハアッ！」

飛び上がったWは、身体を思いつきり回転させ、

「「ファングストライザー!!!」」

そのまま回し蹴りの要領で、ファングジョーカーの必殺技・ファングストライザーをスバルに叩き込んだ。

「やばっ!」

すぐさまスバルは、Wの攻撃をガードしたのであった。

果たして、その行方は……

くアクセルVSノーヴェく

同時刻、アクセルVSノーヴェ戦では……

ノーヴェは拳を叩き込み、アクセルはエンジンブレードでガードした。

「クソッ！」

「甘いな」

そう言ってアクセルはエンジンメモリを差し込んだ。

【ENGINE ELECTRIC】

すると、エンジンブレードの刀身が電気を纏い、アクセルはそれを振り下ろした。

「うおっと!」

ノーヴェはすぐにそれを避けながら隙を窺った。

「(あんな攻撃があるんだ。必ず隙がある筈だ……)」

「(成程、隙を窺っているようだな)」

アクセルもそれを見抜いていた。

するとノーヴェは、真っ向から突進を仕掛けた。

「ウオオオオオオオオオオ!」

「来るか!」

【JET】

するとアクセルは、エンジンブレードの刀身からエネルギー波を放った。

それも気にせずに突進してくるノーヴェ。

「ならコレだ!」

【ENGINE MAXIMUMDRIVE】

今度はエンジンブレードから巨大なA字型のエネルギー波・ダイナミックエースを放った。

しかし、その時であった。

「そこだ！」

その瞬間、ノーヴェはエアライナーを発動させ、それを滑走路のよ
うに進み、アクセルの後ろへと跳んだ。

「しまった！」

隙を作ってしまったアクセルは、すぐさま振り返ろうとした瞬間、

「リボルバースパイク！」

魔力で脚部を強化させたノーヴェのキックが直撃した。

「ガッ！」

攻撃を喰らったアクセルは、その場から吹き飛ばされてしまった。

その様子を見ていた一同。

「あの刀、蒸気だけじゃなくて電気や呼び道具も出せんのかよ!？」

「しかし、ノーヴェも考えたものだな」

恋次はエンジンブレードの仕組みに驚き、シグナムはノーヴェの捨て身の戦法に感心した。

「これならノーヴェの勝ちは決まりだね」

なのはがそう言うが、真之介がこう言い出した。

「いや、まだまだぜ」

「え?」

それを聞いた一同は、疑問を感じてしまった。

起き上がったアクセルと構えを崩さないノーヴェ。

「今の攻撃は中々なモノだな……」

「まあな。悔いのねえように、全力を出した方がよいぜ」

「そうだな……」

するとアクセルは、手に持っていたエンジンブレードを投げ捨て、

「全て……振り切りぜ！」

信号機とストップウォッチが一体化したようなガイアメモリを取り出して、アクセルメモリと取り替えた。

【TRIAL】

グリップを捻ると、アクセルの装甲が赤から黄に変わり、そして装甲が削れると同時に青へと変わった。

『挑戦の記憶』を宿すトライアルメモリの力によって生まれた、青き挑戦・アクセルトライアルへとチェンジした。

「さあ、振り切るぜ！」

その瞬間、アクセルは一瞬でノーヴェの懐に飛び込み、肘撃ちを叩き込んだ。

「グッ！」

ノーヴェはすぐにガードしたが、その一撃の重さによって吹き飛ばされてしまう。

トライアルメモリの特性は『高速移動』で、装甲が削れて防御力が低下してしまうが、その分身軽になったため、極限までの高速移動を持つことが出来るのであった。

「（は……速すぎる……！）」

驚くノーヴェであったが、次の出来事に驚きを隠せなくなってしまった。

「W & amp; アクセル VS スバル & amp; ノーヴェ」

「スバル！」

ドガーンという音と同時に、自分の元まで吹き飛ばされたスバルに驚くノーヴェ。

「いててて…… フィリップさん、見た目に寄らず手強い」

実はスバルは、Wが放つファンゲジョーカーの必殺技・フェングストライザーをガードしたが、その威力に吹き飛ばされてしまったのである。

「こうなったら、行くよノーヴェ！」

「ああ！」

そう言って二人は、拳に魔力を集中していた。

駆けつけたWもこれには驚くが、フィリップがこう言った。

「照井竜、こっちも合体技で決めるよ」

「ああ」

トライアルから元の形態に戻ったアクセルは、マキシマムグリップを捻り出す。

【ACCEL MAXIMUMDRIVE】

「フツ、そうこなつくちゃ」

【FANG MAXIMUMDRIVE】

翔太郎がそう言うと、Wは再びタクティカルホーンを三回弾き、フアングストライザーの準備をする。

「そんなじゃ……タイミング合わせて、“ライダーツインマキシマム”だ！」

「ああ」

「決めるよ」

互いに大技で決める二組。

「ウオオオオオオオオオオ！」

先に仕掛けたのは、スバルとノーヴェ。

放つのはリボルバーシユート。

そしてWとアクセルもその大技に答えるべく、取って置きの技を放った。

「ウウライダー……ツインマキシマム……」

アクセルグランツァーとフアングストライザーによる合体攻撃。

ナカジマ姉妹のリボルバーシユートとライダーコンビのライダーツ

インマキシマムが、ぶつかり合った。

互いの技がぶつかり、その衝撃で吹き飛ばされたのは……

「グアッ」

「ウワッ！」

スバルとノーヴェであった。

「お嬢さん方、まだやるかい？」

翔太郎がそう言うと、上半身を起こしながら二人はこう言った。

「いえ、参りました」

「参ったよ、降参だ」

模擬戦第八試合は、息の合った合体技で勝利を手にしたWとアクセ

ルの勝利であった。

第二十八話：赤き加速と牙の切り札（後書き）

次回、白い魔王VS神浄の討魔

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔（前書き）

模擬戦に入る前日、高町なのはは夢を見た。

そこには白く美しく、まさに純白と言っても良い世界であった。

「ここは？」

驚くのはであるが、彼女の前にある人物が現れた。

「なのは」

「え？」

振り返ると、そこには自分に魔法を教えた人物、ユーノ・スクライアにそっくりな銀髪の青年であった。

「ユーノ……君？」

余りにも似ていたため、つい彼の名前で呼んだ。

すると青年は、首を横に振りながらこう言った。

「違うよ、僕の名前は　だよ」

「（聞こえない？）」

しかし、彼が名乗ろうとするとノイズが入った感覚になってしまい、名前が聞けなかった。

「どつちやら、今の君にはまだ僕の名前は聞こえないようだね」

そう言って青年は姿を消した。

「待って！」

追いかけてよとしたのはは、そのまま目を覚ましたのであった。

「ゆ……………夢？」

しかし、これが現実になるとは、まだ誰も知らなかった。

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔

フェイトと神裂、スバルとノーヴェにフィリップと照井が戻ってきたところで、

「さて、最後の四試合の組み合わせを発表するわ」

そう言って閃可は組み合わせを発表した。

「第九試合・高町なのはVS上条当麻」

「ほえ!?!」

「え!?!」

これにははのはも上条も驚きを隠せなかった。

「第十試合・坂田銀時VS斬月」

「あの〜……斬月って……誰?」

銀時がそう言うと、一護が答えた。

「斬魄刀だよ銀さん」

すると真之介は、何処からか奇妙な形の人形を取り出した。

「お前……それ……」

「転神体……隠密機動の重要霊具だ。一護、刀をコイツに刺せ」

言われた一護が刀を突き刺した直後、彼の隣に長身でサングラスを掛けた黒ずくめで長身の男が出現した。

「久しぶりだな、一護」

「オッサン……」

それを見た銀時は、恐る恐る尋ねた。

「あの……もしかして、斬月さんで宜しいでしょうか？」

「ああ」

「……「エエエエエエエエエエ！？」」「」」

それを聞いた死神メンバー以外は、驚きの余り言葉が出なかった。

「次行くわよ。 第十一試合・浦飯幽助VS黒崎一護」

「ヨッシャア！ 待ってましたアアアアアア！」

ヤル気満々の幽助に、一護は若干式気味であった。

「そして第十二試合・奴良リクオVS沢田綱吉」

「宜しく願います」

「あ、うん。 宜しく」

そう言ってツナとリクオは互いに礼をする。

「それじゃ、なのはと当麻はフィールドに向かって」

なのはと上条は、すぐさまフィールドに向かった。

第九試合……雪のフィールドでは、なのはと上条が立っていた。

「（イキナリ不幸だ……隊長やってるってことは、相当強いって事だよな……）」

そう言ってイキナリネガティブになる上条。

「行っておくけど当麻君、手加減はしないよ」

そう言ってなのはは、レイジングハートを構えた。

「クッ！」

こうして高町なのはと上条当麻の戦いが、気って落とされたのだった。

「行くよ、レイジングハート！」

するとなのはは、魔方陣を展開させ、レイジングハートの砲撃を上条に放った。

「エクセリオン……バスター！」

「クソッ！」

それを見た上条は、すぐさま避けながら走り出した。

目指すのはなのはの元。

「プロテクション！」

それを見たなのはは、魔法の防御壁を作り出し周りを固めた。

だがしかし、ここで思わぬ出来事が起きた。

「ウオオオオオオオ！」

上条の右手に触れた瞬間、ガラスのように砕かれたのであった。

「そんな!?!」

驚くなのはは上条は拳を叩き込むが、なのははすぐさま空へ飛んだ。

「クソッ！」

攻撃がヒットできなかった事に苛立つ上条。

しかしなのはは、それ以上の疑問を感じた。

「（どういう事！？ 当麻君の手に触れた瞬間、プロテクションが砕かれるなんて……）」

すると今度は、スラッシュムーブで上条の背後に回ると、

「な！？」

「取った！（いくら当麻君でも、手を握られたら逃げる事が出来ない！！）」

そう言つて、上条の右手を掴んだその時であった。

バシウウウという音と共に、バリアジャケットが袖から徐々に解け出してしまったのだ。

「え！？」

驚いたなのは、すぐさま彼の右手を振り払い、再び空へ飛んだ。

「また上か！！」

そう言つて渋い顔をしながら空を飛ぶのはを見る上条。

「（どう言うこと！？ 当麻君に触れた瞬間、バリアジャケットが解けた！？）」

驚き隠せないなのは、肌が露出した左腕の袖を修復させた。

「だったら……」

今度は上条に向けて指を向けると、

「チエーンバインド！」

魔力で作られた鎖が、上条の身体を縛り上げた。

「な!？」

「今だ！」

驚く上条に構わずなのは、レイジングハートを向けながら、

「デイバイン……………バスタアアアアアアアアアア！」

十八番の魔法・デイバインバスターを放った。

「ゲツ!？」

そのまま魔力の砲撃は、上条へと放たれた。

「（勝った!）」

なのはがそう思った、次の瞬間であった。

バシユウーンという音と共に、右手を突き上げた上条が、デイバインバスターを打ち消したのだった。

「な!？」

バインドで身動きを取れなくなったハズでありながら、自分の魔法を打ち消した上条に驚きを隠せなかったなのは。

「クッ！」

再びバインドを放つが、

「無駄だぜ」

上条の右手に触れた瞬間、バインドが消えてしまったのであった。

「な!？」

「いい加減に降りて来いよ。まだ勝負は始まったばかりかだぜ？」

驚くのはに、上条は似合わない挑発をかました。

モニターを覗いていた六課メンバーは、驚きを隠せなかった。

「ウソ………なのは魔法が効かない!?」

「どういう事や!? ウチ等の切り札“エース・オブ・エース”、
“管理局の白い魔王”の魔法マジックが効かないなんて!？」

動揺を隠し切れないフェイトとはやてに、真之介は説明した。

「まあ、相手が当麻っていう事自体でアイツの余裕は、既に殺されてるけどな」

「どう言う意味だ?」

シグナムの問いに閃可が答えた。

「上条当麻の能力名は『幻想殺し(イメージブレイカー)』。その右手に触れた異能は打ち消され、無効化する事が出来るの」

「異能を打ち消すだと!? そんな能力、聞いた事ねえぞ!」

ヴィータがそう言うが、真之介がサラッとこう言った。

「じゃあ、目の前にある状況は夢か? 言っておくが、あの右手に能力者が触れると能力を無効化させることが出来るんだ。さつきなのはバリアジャケットが解けかけたのも、アイツが当麻の右手に触れたからだ」

それを聞いた科学と魔術メンバー以外の一同は、驚愕を隠しきれなかった。

「能力者本人に触れたら、能力が使えなくなるって!？」

「どんだけチートな能力だよ!？」

さらに追い討ちを掛けるように、閃可がこう言った。

「彼の能力を知っているものは、“神をも浄化させる魔の討伐者”という意味から、彼のことを“神浄の討魔”と呼ぶ者もいるわ。または神の上に立つ者という意味で“神上”と呼ぶ者もいるから」

「神の………上に………立つ!？」

それを聞いただけでも、全員が凍りついた。

魔法を無効化され、接近も出来ないのは。

「（どうすれば……………」

動揺で戦えない彼女であったが、突如目の前にある人物が現れた。

「アナタは……………」

それは夢の中で出会った、ユーノに良く似た銀髪の青年であった。

「なのは、怖がらないで。恐怖は、全てを支配する。君はまだ、僕の名前を呼んでいない。」

その瞬間、なのはの中の何かが目覚めた。

「恐怖を捨て、前を見て！ 臆せば失う、呼んで、僕の名は」

「澄み渡れ……………」
『せいがい星界』！！』

『彼』の名を呼んだ時、なのはの奥底に目覚めた力が放たれた。

突如起きた光に驚き、上条はすぐさま目を瞑った。

目を開くと、そこにはレイジングハートを右手に、星型のチャクラムを左手に持ったなのはがいた。

「何だ、その武器は!？」

驚く上条であったが、なのははその問いにこう答えた。

「これが、私の新しい力……斬魄刀の『星界』」

「「「「「エエエエエエエエエエエエエエ!？」「「「「「

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

「「どう言うことだ!　なのは殿に死神の力があつたというのか!？」

「知るかよそんなこと！」

死神メンバーは驚きを隠せなかったが、閃可は不適に笑いながら呟いた。

「遂に目覚めたか」

ユツクリと地上に降りたなのは。

それを見た上条は、あるモノを腰に巻いた。

外見はダブルドライバーのロットが右側のみしかないような形状のベルトで、名はロストドライバー。

そして上条は、懐から一本のメモリを手にした。

【JOKER】

そのメモリを差し込むと、上条はスロットを横に倒した。

「変身！」

【JOKER】

次の瞬間、上条の体が徐々に黒い戦士に変身した。

それは翔太郎が変身して見せた、仮面ライダージョーカーであった。

只違うのは、右手に白い炎のような模様が付いていた事であった。

この姿を観た翔太郎とフィリップは、

「とうとう変身したか、当麻」

「見せて貰うよ、君の力を」

そう言って愛弟子の姿を観ていた。

「仮面ライダージョーカー……上条v rって所かな」

「いや、ホワイトフレアって呼ぶべきだなって」

そう言っつて閃可と真之介は映像を観ていた。

「行くぜ！」

「ええ！」

そう言っつて上条が変身した仮面ライダージョーカー（以下ジョーカー）と斬魄刀とレイジングハートを構えたのはが、全てを出そうとしていた。

果たして、死神の力によつて世界を覆う星の刃を手にした白い魔導師と、白い炎を纏う右手を持った黒い切り札と化した幻想殺しの戦いの行方は！？

次回に続く。

第二十九話：白い魔王VS神浄の討魔（後書き）

次回、流星の刃と怯まぬ信念と白い夜叉VS黒い賢者

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者（前書き）

速めに終わりそうです。

銀さんVS斬月戦

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者

斬魄刀・星界せいかいを手にしたなのはと、仮面ライダージヨーカーに変身した上条（以下ジヨーカー）。

この二人の戦いに、決着が着くのであった。

「星界、レイジングハート……行くよ！」

「これで決めるぜ！」

流星の刃と怯まぬ信念と白い夜又VS黒い賢者

「うおおおおおおお！」

ジョーカーはなのはに向かって突進して行く。

「ハッ！」

するとなのはは、星界をジョーカーに向けて投げ飛ばした。

シュルルルと飛んで行く星界。

「そこ！」

その瞬間、星界が二つに分かれ、ジョーカーの左右に飛んで行く。

「な!？」

驚くジョーカーであったが、そのまま星界はジョーカーに向かって方向を変える。

「クソッ！」

ジョーカーは飛び上がってかわすが、星界は元の一つに戻ってなのはの手元に戻った。

「ブーメランかよ！」

これにはジョーカーもツツコミを入れる。

「だったらコレだよ」

なのはは星界を握りながら、ジョーカーに振り下ろした。

「クッ！」

イマジンブレイカー
右手でそれを防ぐジョーカー。

しかし、死神の魂を具現化させた武器である斬魄刀は、膨大な霊圧を宿しているため打ち消す事はできない。

「オラア！」

右手で刃を振り払ったジョーカーは、すぐさま後ろへ下がった。

それを見たなのはは、星界を上空へ投げ飛ばしてこう言った。

「星空喜劇・第一幕『天之川』！」

その瞬間、無数の刃と化した星界が降り注がれたが、

「！！！」

コレを見たジョーカーは迷わず、なのはの方へ走りだした。

しかし、なのはも油断を見せなかった。

レイジングハートからピンク色の光が集中され、

「スターライト……ブレイカアアアアアアアアアア！」

最強の必殺技『スターライトブレイカー』を放った。

「クツソオオオオオオオ！」

すぐさまジョーカーは、メモリを取り出しマキシマムスロットに差し込んだ。

【JOKER MAXIMUMDRIVE】

「ウオオオオオオオオオ！」

右手に白いエネルギーが集中した『ライダーパンチ』で、『スターライトブレイカー』を防いだ。

バシューンという音と共に、スターライトブレイカーを打ち消したが、無数の星界が襲い掛かって、ダメージを負った。

「クツ！」

逃げ出そうとするジョーカーであったが、なのはがそれを許さなかった。

「レイジングハート、星界……行くよ！」

「やったああああ！　なのはママが勝ったよー！ー！」

「凄いよなのは！」

「見事だ」

「ほんまに凄いわ、なのはちゃん」

六課メンバーの一人一人が、なのはの勝利に大いに喜んだ。

逆に科学・魔術メンバーは、

「うそ……アイツが……アイツが負けるなんて!？」

「信じられねエ……」

「まさか……上条当麻が……敗北!？」

上条の敗北に驚きを隠せなかった。

「ハア…………ハア…………ありがとう、レイジングハート…………それに…………星界」

そう言うてなのはは、二つ相棒を握り締めた。

だが、なのはにとって予想外の出来事が起きた。

煙が晴れると同時に、ジリツという足音が聞こえた。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

「な!？」

そこには上条当麻の姿があった。

変身が解け、ボロボロになっていながらも、傷だらけの身体で立っていた。

「ハア…………ハア…………ハア…………」

上条自身も体力が限界であるが、そのままなのはの方へ歩き出す。

「そ…………そんな…………」

霊力と魔力を消耗したなのはも立っていられるのが精一杯。

しかし上条は、彼女の方へユツクリと歩き出した。

「うそ……………今のなのは、ホントの全力全開のハズなのに!？」

「ホンマや! 本気を出したなのはちゃんの攻撃を喰らって、立ち上がるなんて!？」

「奴は本当に人間か!？」

「打たれ強いにも程があるぜ!！」

本気のはのはの攻撃を受けて尚、立ち上がった上条にフェイトとはやては驚き、シグナムとヴィータは彼の打たれ強さに驚きを隠せなかった。

無論、他の六課メンバーもである。

すると真之介は、冷や汗を掻きながらこう言った。

「アイツの……上条当麻の本当の恐ろしさは、『右手』の力でも無ければ、相手の能力に応じた戦法でも無い……どんなに傷だらけになっても、どんなに不利な戦いにも決して怯まずに立ち向かう揺ぎ無い精神力と信念だからな。言ったら、上条が相手になった時から既になのはの負けは決まってるって」

それを聞いた一同は、驚きを隠せなかった。

『信念』……それが上条当麻を動かす原動力であるなら、精神面で彼に勝てるモノは居ないであろう。

「あ……ああああ………」

徐々に歩き出す上条。

今すぐに逃げ出したいのはであるが、恐怖で体が動けなかった。

「クッ！」

抵抗しようとする星界を振るうが、上条はそれを右手で弾いた。

霊力を失った星界は、元の形状である星型の鏢の斬魄刀へと変わる。

「歯あ……食い縛れよ、魔導師」

そう言っ上条は、右手を強く握り締め、

「俺の……いぢげき全力全開は……少し……響くぜ」

ドガツと、思いっきりなのは顔を殴り付けた。

「ガツ……」

殴られたのはは、なんとか踏み止まるが、

「やっと……一発……入れられ……た……」

そのまま上条が倒れる場面を見届けたのであった。

「か……勝った……んだ」

模擬戦第九試合…限界を超えた戦いの末、上条が気絶という形でなのは勝利を収めた。

「こ……今度こそ……なのは勝ちだよな？」

「そ……そうみたいやな……」

上条がまた立ち上がるんじゃないか、という考えが頭から離れられないフェイトとはやて。

「シグナム……お前、当麻と戦いたいか？」

「ふ、ふざけてるのかヴィータ！ 相手は高町の攻撃を受けて立ってられるだけじゃなく、そのまま戦おうとした奴だぞ！？ そんな奴を相手にする事だけでも考えたら、背筋が凍ってしまうわ！！」

ヴィータの質問に必死で答えたシグナム。

それを聞いたフォワード陣のメンバーも、愕然としていた。

「シグナム副隊長が恐怖すると言い出すなんて……………」

「あの人、どれだけ恐ろしいのよ……………」

「もしかして、一番怖いのは上条さんの方じゃ……………」

「そ、そうだね……………」

第十試合目……………荒野のフィールドでは、銀時と斬月が立っていた。

「んじゃ、行きますか」

銀時はそう言っつて右手に木刀、左手に日本刀を手に持っていた。

因みにこの日本刀は、閃可から貰った物である。

「（スゲエ闘気だぜ……コッチが押し潰されそうじゃねえか）」

今まで無い闘気を感じた銀時は、思わず冷汗を掻く。

「行くぞ！」

瞬歩で懐に入った斬月。

ガキーンという音と共に、木刀と日本刀を交差させてガードする銀時。

「んぎぎぎぎぎ……」

しかし銀時は、攻撃をガードするだけが精一杯で、反撃が出来ない。

「ハッ！」

斬月はガラ空きの腹部を蹴り、銀時を吹き飛ばす。

「ガッ！」

吹き飛ばされた銀時は、後ろの岩山へ吹き飛ばされる。

「ぐ……あ……」

予想以上の強さに苦戦してしまう銀時。

「立て、坂田銀時。勝負はまだ、コレからだ」

そう言って斬月は刀を構えていた。

第三十話：流星の刃と怯まぬ信念と白い夜叉VS黒い賢者（後書き）

次回、目覚めた夜叉^{おに}

オリジナル紹介

「斬魄刀」

名前：星界^{せいかい}

所有者：高町なのは

解放の句：澄み渡れ『星界』

能力：高速追撃、分裂飛行

詳細：死神の力を覚醒させた高町なのはの斬魄刀。

通常時は鍔が星型の日本刀であるが、解放後は刀身が星型の戦輪^{チャクラム}に変わる。

分裂して相手を錯乱させたり、追撃を行う事ができる。

必殺技は、魔力を集中させたレイジングハートの先端に星界を取り付けて放つ『流星光破^{シューティングスターライトブレイカー}』。

本体は、外見がユーノ・スクライアに良く似た長い銀髪の青年。

（仮面ライダー）

名前：仮面ライダージョーカー・ホワイトフレア

変身者：上条当麻

使用メモリ：ロストドライバー、ジョーカーメモリ

能力：身体能力向上、異能無効化

詳細：上条当麻が変身する仮面ライダー。

外見は翔太郎のジョーカーに似ているが、右手には白い炎のような模様が付いている。

『ジョーカー・ホワイトフレア』が正式な呼び名であるが、本編では『ジョーカー』と呼んでいる。

身体能力の向上だけでなく、上条の能力である『幻想殺し』と同様に異能の無効化が可能。

必殺技は白いエネルギーを纏いながら放つ『ライダーパンチ』。

彼が使用するジョーカーメモリは、外見は翔太郎のモノと同様であるが、頭文字の色が白である。

第三十一話・目覚めた夜叉（前書き）

銀時が遂に！

第三十一話・目覚めた夜叉

「ハア…………ハア…………ハア…………ハア…………」

斬月の驚異的な強さに、絶対絶命となった銀時。

「立て、坂田銀時。勝負はこれからだ」

果たして、銀時に勝算はあるのか！？

刀を構え、真っ向から突進して行く斬月。

「ハッ！」

「クッ！」

銀時はすぐさま防ぐが、

「そんな甘い剣では、斬月わたしの刃は防げん」

そう言ってそのまま銀時を吹き飛ばした。

「ガアッ！」

吹き飛ばされた銀時は、立つのが精一杯であった。

「どうした、その程度か？」

表情を一回も変えない斬月に、銀時はポツリと呟いた。

「どつやら……此処までだな」

「そんな、銀さんが……………」

新八は、追い詰められている銀時の姿を見て、驚きを隠せなかったが、

「何ビビッてるネ新八！」

「んが！」

神楽に殴られてしまう。

「私達がしっかりしなけりゃ、誰が銀ちゃんを信じるアルか！」

「神楽ちゃん……………」

神楽の喝を受けた新八は、モニターに目を向ける。

「頑張ってください、銀さん！」

ボロボロの身体を起こしながら刀を構える銀時。

「成程、威勢は大したものだ」

そう言って斬月は、刀を上挙げ、

「だが、コレならどうだ」

そのまま振り下ろした。

その瞬間、膨大な霊圧による巨大な斬撃が放たれ、

「……」

コレに驚く銀時は、必死で避けた。

ドガーンという音と共に、地面が一直線に斬れていた。

「オイオイ、マジかよ」

驚く銀時に斬月がこう言った。

「今の技は、斬月わたしの刃に霊力を吸収させ、巨大な斬撃を放つことが出来る。名を『月牙天衝』」

すると斬月は、刀を前方に向け、

「既に私達の事は聞いている筈……ならば、『これ』を隠す必要はないな」

そう言つて真の力を解放した。

「卍……………解!!!」

その瞬間、膨大な霊圧が解放され、周囲は煙に覆われた。

「クッ!」

煙が晴れると同時に銀時は思わぬモノを目にする。

「な!?!」

「行くぞ……………」

そこに居たのは…………

「アンタ……………斬月か!?!」

「ああ。いや、今の私の正式な名前は『天鎖斬月』だ」

黒いフード付きの服を身の纏つた、二十代くらいの青年と化した斬

月が、卍解としても自分のもう一つの姿・天鎖斬月を手にしていた。

「って、若返ったあああああああああ!?!」

「どうということアルかアアアアアアアアア!?!」

新八と神楽は、卍解した斬月の姿に驚きを隠せなかった。

「おいおい、万時屋のヤロウ……マジでやばいぞ」

普段銀時と喧嘩する土方も、コレばかりは彼の身を案じた。

「月牙……………天衝」

「!!」

再び放つ月牙天衝に、銀時はすぐさま避けた。

「クソッ！ あの技、何発も撃てんのかよ!!」

しかし斬月は、瞬歩で先回りして彼を蹴り飛ばした。

「ガッ！」

蹴られた銀時は、その場から吹き飛ばされた。

「この程度か……………興醒めだな」

そう言って斬月は、背を向けて歩き出す。

「（このまま……………負けるのか……………）」

銀時はそう思いながら、瞼を閉じた。

二十年前…一人の少年が屍の所持品を剥ぎ取っていた。

その姿を見た者は、彼を『屍を喰らう鬼』と呼んでいた。

そんなある日、少年の噂を聞きつけた男が現れた。

「おやおや、“屍を喰らう鬼”が居ると聞いて、此処まで来たのですが………」

男は、少年の頭に優しく手を置いた。

「なんとも、可愛らしい鬼がいましたね」

しかし少年は、男の手を払い、刀を構えた。

「良い刀ですね。それもその屍から取ったモノですか？ よく此処まで、己の身を守れましたね」

すると男は、自分が差していた刀を取り、それを少年に与えた。

「差し上げます。もうその刀は必要ないでしょう」

そう言つて男は背を向け、少年にこう言つた。

「刀（そいづ）の使い方を知りたければ来なさい。他人（ひと）に怯え、自分を護る為の剣はもう必要ない」

少年に優しく、穏やかな声でこう言つた。

「教えてあげますよ。敵を斬るための剣ではなく、己を護る為の剣でもない、己の魂を護る為の剣を………」

斬月が立ち去ろうとしたその時、

「!?!?」

もの凄い闘気を背中から感じ取り、振り返つた。

そこには、ボロボロに身体に鞭を打つて立ち上がった銀時が、今まで感じられなかった闘気と剣気を放ちながら立っていた。

「うおおおおおおお！」

その瞬間、銀時は驚異的な速さで懐に入り、刀を振り上げた。

「!?!」

斬月はすぐさま攻撃を防ごうとするが、

「グッ！」

ザンツと彼の一撃を受けてしまった。

「クッ！」

斬月はすぐさま反撃しようと刀を振るうが、

ガシツとその刃を銀時に受け止められてしまう。

「!?!」

素手で刃を受け止めた銀時に驚く斬月であるが、

「(う……………動けない!?)」

ピクリとも刀が動けない事に驚きを隠せなかった。

刀を手放して引こうとするが、銀時は彼の足にドスンと刀を突き刺した。

「な!？」

刀を封じられ、足までも封じられた斬月には、もう逃げ場が無かった。

「オラアアアアアアアアアアアアアアアア！」

木刀を手に持ち、連続で叩き込む銀時。

「ガッ！」

怒涛の反撃に逃げる事が出来ない斬月。

実は銀時は、『白夜叉』と呼ばれ、敵味方双方から恐れられる程の実力を持っている。

そう、彼は呼び起こしてしまったのだ。

死神をも退ける、本物の夜叉おにを……。

反撃の隙が作れない斬月は、こう思った。

「（強い……恐らく、一護以上の修羅場を経験している……）」

「コイツで………終えだあああああああ……！」

最後に銀時の頭突きが決まり、

「（私の……負け………だ………）」

その瞬間斬月は、頭部と思われる部分にヒビが入った神転体へと戻ったのであった。

模擬戦第十試合………極限の命のやり取りの中で、奥底に眠る戦いの記憶を甦らせた銀時の勝利であった。

第三十一話・目覚めた夜叉（後書き）

次回、死神代行VS霊界探偵

第三十二話：死神代行VS靈界探偵（前書き）

虎龍

「遂に私がやりたかった戦いが始まります!!」

第三十二話：死神代行VS霊界探偵

自身の斬魄刀・斬月を倒した銀時に驚く一護であったが、

「オシ！ 行くぞ！！」

気合を入れ直したのであった。

「そんじゃ、宜しくな幽助」

「おう、こっちも宜しくな」

そう言って一護と幽助は、握手を交わすのであった。

第十一試合目のフィールドがモニターに映った。

これを見た石田が、ある事に気付いた。

「随分と普通のフィールドだね……何か、何処かの格闘技大会のリングみたいだな……………」

それを聞いた幽助が、あることに気付いた。

「ああー！ これ、暗黒武術会の闘技場のリングに似てねえか!？」

「あ、そう言われるとそうだなぜ!」

「懐かしいですね」

「フン」

それに続くように、浦飯チームのメンバーが感想を言った。

「そうだ。折角、幽助がこの模擬戦で戦うからな。これぐらいは派手にやった方が良くないかと思ってるな」

「サンキューな真之介！マジで楽しくなって来ちまったぜ！！」

真之介の言葉に幽助は嬉しそうに言った。

こうして、一護と幽助はフィールドにワープした。

第十一試合：暗黒武術会の闘技場フィールドの立つ一護と幽助。

「良く来たわね」

そう言って閃可がバニーガールの衣装を身に纏い、マイクを手に持っていた。

「何やってんだよ閃可？　つか、アンタは戦わないんじゃないかねえのか？」

一護がそう言うと、閃可がこう言った。

「何言ってるの！　私は審判なんだから、コレぐらい気合入れるの

は当然でしょう?。」

「審判? 何言ってるんだ? 模擬戦なんだからそんなの必要無いだろ?。」

「此処から暗黒武術会のルールに従って貰うからね。」

「マジでか!。」

ルール?という顔で疑問を持つ一護とは逆に嬉しそうな幽助。

「えーと……………この模擬戦のみのルールは、先に相手を倒した方が勝ちなんだけど、相手が倒れて10数える間に相手が起き上がらなければ勝ち。無論、場外に吹き飛ばした相手を10数える間にリングへ復帰させないのも勝ちに入るわ。」

「ハア!?! 場外負けて事なのか!?!。」

「そう……………今から、黒崎一護VS浦飯幽助による『ミニ暗黒武術会』を開催する!!!。」

そう言って閃可は叫んだのであった。

「あ……暗黒武術会と同じルールで戦えた！？」

「成程、この模擬戦自体を暗黒武術会にすることか」

「確かに、面白そうですね」

モニターを聞いた桑原、飛影、蔵馬の三人は様々な感想を述べた。

すると、なのはと上条がやって来た。

「今から試合？」

「はい。今、一護さんと幽助さんの試合になります」

「マジかよ。間に合って良かったぜ」

因みに、上条を見た一同は内心驚愕した。

「（え……一度気絶したのに、復活した！？）」

「（回復力早っ！？）」

「（不死身か！？）」

「ん？」

そんな上条本人は、全く気付いていなかった。

リングに立つ、一護と幽助。

「それでは……………始め！！」

閃可の合図と共に、二人の試合が始まった。

「行くぜ！」

そう言っで一護は斬月を構え、

「月牙天衝！」

必殺技『月牙天衝』を放った。

しかし、幽助は全く動こうとしなかった。

「な！？（何考えてるんだアイツは！？）」

一護はそう思ったが、驚くべき事が起きた。

「すう………喝ッ！！」

一度息を吸い込んだ幽助が、気合で月牙天衝を掻き消したのだ。

「な！？」

これには一護も、驚きを隠せなかった。

「行け、一護。 テメエの本気、見せて貰うぜ」

それを聞いた一護は、少し笑いながらこう言った。

「良いぜ……見せてやるよ。 コイツが俺の『卍解』だ！」

そう言っつて斬月を前方に向けた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオオオ！！」

膨大な霊圧が解放され、それを肌で感じ取った幽助。

「（スゲエ霊力だぜ。 こんな奴が異世界に居ただけでも信じられねえ……）」

「卍・解！」

そして一護の身体を黒い霊圧が包み込み、

「す……………スゲエ……………」

幽助はその姿に驚きを隠せなかった。

そこには、斬月のコートに似た死魄装に黒い『卍』型の鍔と柄に途切れた鎖の付いた黒い日本刀を手にした一護。

コレこそ、彼の卍解・天鎖斬月である。

「行くぜ！」

一護は天鎖斬月の能力である超速移動で後ろに移動し、

「!?!」

「ウラァ！」

幽助に回し蹴りを叩き込んだ。

「（コイツ……………あの状況で肘打ちと蹴りを仕掛けようとしやがった!）」

しかし、油断も隙も無い彼の反撃に冷汗を掻いた。

「痛え……………良いもん持ってんじゃねえか」

そう言って幽助は立ち上がり、切れた口から出た血を拭った。

「あの幽助って奴、一護の攻撃に合わせて肘打ちと蹴りを仕掛けようとしやがった」

リボーンは、モニターで幽助の戦いを見抜いていた。

「あ、あの状況で反撃しようとしたって言うんですか!？」

獄寺は、幽助に驚きを隠せなかった。

「フン………幽助め、久々に戦り甲斐のある奴と出会えて楽しんでやがる」

そう言って飛影は、腕を組みながらニイと笑った。

「あの状況で反撃しかけるたあ、油断も隙もねえな」

「お前の蹴りも結構効いたぜ。コイツは禪締めて掛かんねえとな」

刀を構える一護に、幽助は唇をペロリと舐めながらそう言った。

「だったら、コイツはどうだ？」

そう言っで一護は、両手で刀を握り締める。

その瞬間、天鎖斬月の刀身から黒い霊圧が纏いだす。

「新技・月牙空斬^{けつがくうざん}！」

月牙天衝を纏った刃で、幽助に攻撃を仕掛ける一護。

「オラァ！」

「うおっとー！」

すぐさま幽助は避けるが、ドガーンという音と共にリングが抉れた。

「まともに喰らったら、ああなるのか……面白え」

「良い反応だな……」

そう言って一護は、月牙を刃に纏いだが、

「させるかよ！」

幽助が懐に入って、高速でパンチを打ち込む。

「グッ!!」

「オラオラオラオラオラアアアアアアアアアアアア!!」

何とか斬月の刃で防ぐ一護であつたが、

「（何つう速えパンチだよ！ しかも、この一撃一撃が鉛みてえに重てえ!!）」

一発一発が重い幽助のパンチに驚きを隠せなかった。

「一護が押されてやがる！」

「信じられん……………あの一護が!?!」

恋次とルキアは、一護が押されているという事に驚きを隠せなかった。

「浦飯の奴、前よりパンチの速さが上がってねえか」

「確かに、また一段と強くなってますね」

「フン、次は必ず勝ってやる」

「モニターだけで、そこまで分かるんですか!?!」

幽助が強くなっている事に気付いた浦飯チームのメンバーに、神裂が驚いてしまった。

「（やべっ……もう、限界だ……）」

防ぐのが精一杯の一護であったが、

「オラア！」

ドガツと幽助のパンチを一発喰らってしまつた。

「い」

「そこだアアアアア！」

その一撃に、一護はすぐさま空中へ逃れた。

「くそお！ 空中うそかよー！！」

苛立つ幽助であったが、

「いつつうゝ………何つうーパンチだよ！ チャドのパンチより強いだろー！！」

一護は殴られた腹部を押さえながらそう言った。

しかし、それも束の間であった。

「喰らいやがれー！！」

指鉄砲のように構えた右手の人差し指から、幽助が強力な一撃を放った。

上空へ放たれた霊丸。

「な!？」

その巨大さに、一護はすかさず月牙を放った。

しかし、霊丸は月牙を飲み込み、そのまま一護に命中した。

「クッ……………」

だが、一護は大したダメージしか受けていなかった。

「咄嗟にもう一回月牙を撃って、威力を下げたか……………やるな」

そう言って幽助は一護の咄嗟の判断に感心を持った。

第三十二話：死神代行VS靈界探偵（後書き）

次回、似たもの同士

第三十三話：似たもの同士（前書き）

死神と魔族の激突は、更にヒートアップです。

第三十三話：似たもの同士

上空で幽助を見下ろす一護と、地上で一護を見上げる幽助。

「来いよ一護。喧嘩はタイムマンが常識だからよ」

「ああ………やってやるよ！」

そう言っで一護は再び月牙を刃に纏った。

モニターで幽助が放った技を見た死神メンバーと六課メンバーは、驚きを隠せなかった。

「な……………何だあの技は！？ 死神の鬼道に似ている！？」

「まるで私のデイベインバスター並の破壊力だよ！！」

ルキアとなのはは驚きながらそう言つと、真之介がこう言った。

「アレは『霊丸』て言つてな、幽助の十八番の必殺技なんだよ」

「どんな技なんだ？」

恋次の問いに、真之介は説明した。

「指に一点を集中させることで、強力な霊力、または妖力の弾丸を放つことが出来る技なんだ。まあ、あれでも二分にぶくらいの威力だぜ？」

「ウソやる！？ あれでまだ、20%しか出してないんか！？」

「おいおい……………飛影も蔵馬も、それに桑原もまだ本気を出してない

方なんだぜ？ あれを本気だと信じてる時点で、お前等は幽助達には勝てねえぞ」

驚くはやてであったが、真之介の言葉に再び驚愕してしまう。

「行くぜ！」

刃に月牙を纏わせた一護は、そのまま幽助に向かって急降下し始めた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオ！」

一護が急降下していく中、幽助は何かを待つように立っていた。

「（な……………何のつもりだ！？）」

疑問を感じた一護であったが、その疑問は一気に晴れてしまう。

斬月を振り下ろした一護。

しかし次の瞬間、

「な!？」

幽助が霊丸の構えを取りながら、こう言ったのであった。

「さあ、どっちが丈夫タフかな？」

この瞬間、零距离の月牙天衝と霊丸が相殺による爆発を起こした。

ドゴーンという音と共に砂煙が舞い上がる。

「あのヤロウ、一護が月牙を放つ瞬間を待ってやがったのか!！」

「以外に頭が良いな」

恋次は幽助の行動に驚き、リボーンはその意外性に感心した。

しかし、飛影が否定するようにこつ言った。

「違うな、幽助は自他認めるほどのバカだ。何を考えてるのはオレにも分かん」

「全くだぜ」

「ホントにバカですからね」

「それ、褒めてるんか？」

飛影に続くように桑原と蔵馬もそう言つと、それにはやてがツッコミを入れた。

閃可は、二人の安否を確かめるように見渡す。

「クソお、上手く行った筈なんだけどな」

そう言つてリングに戻った幽助。

「危ねえ〜……あの時飛ばなかったらやられてたぜ」

一護も上空でそう言っていた。

「（……………流石に、同じ手段は効かねえと思うな……………）」

幽助はそう思いながら、一護を見上げた。

「（一か八か、コイツで決める……………）」

一護はそう思いながら、斬月の刃に全て霊力を込めた。

「ウオオオオオオオオオオオオオオオオ！」

ドゥーンという音と共に、一護の霊圧が一気に解放された。

「……」

これを感じ取った幽助は、

「（一気に勝負に出るか……………面白え……………）」

闘争心が湧き上がり、拳に妖力を一点に集中させた。

「行くぜEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEEE……」

「おいおいアイツ等、トンでもねえほどの靈力や妖力を解放してやがる！！」

「互いに次の勝負で決める気だ」

「フン、面白い」

モニターを観て浦飯チーム一同はそう言っていた。

「死神と魔族……境遇が良く似たもの同士の戦いが、此処まで面白いとはな」

真之介もそう言って、二人の戦いを観ていた。

構えを取りながら、一気に力を解放する二人。

「行くぜ！」

遂に、全ての力を出そうとしていた。

「ウオオオオオオオオオオオオ！」

一護は急降下しながら月牙天衝を放った。

「フンッ！」

幽助はすぐさま右手で受け取り、

「うおおおおおおお！」

そのまま別の方向へ投げ飛ばした。

しかし、その瞬間を見逃さなかった一護は、

「そこだあ！」

一気に月牙を纏った斬月を振り下ろした。

だが、その時であった。

ガシツと幽助が左手でその刃を受け止めたのであった。

「な!？」

これには一護も驚いてしまう。

「喰らえエエエエ……………」

そんな彼の隙を見逃さなかった幽助は、強力な一撃を叩き込んだ。

「霊光だあああああああん！」

放ったのは、霊光波動拳の技の一つ『霊光弾』。

「がっ
」

ドガーンという音と共に、一護は場外まで吹き飛ばされてしまった。

「何だあの技！？ 幽助の奴、あんな技まで持ってたのかよ!？」

驚くヴィータの問いに、真之介は説明をした。

「あれは『靈光弾』って言ってな……全体に集中した気を拳に集めて、相手に叩き込む技だ。一直線に撃つ靈丸と違って、広範囲に放つことが出来るため、バリエーションとして散弾銃のように飛ばすことも出来るんだ。アイツはそれを『ショットガン』って呼んでるがな」

それを聞いた茶渡は、驚くようにこう言った。

「つまり、幽助は遠近両方の技が撃てるということか？」

「そう言うことだ。まあ、アレでも精々50%くらいだと思っけどな」

最後の真之介の言葉に、全員が驚きを隠せなかった。

「5……6……7……」

カウントを行う閃可。

一護は全く起きようとしない。

「……………」

何時でも戦闘が出来る準備をする幽助。

すると、ガシャリと瓦礫の中から一護が起きるが、

「お前、スゲエな……………完敗……………だぜ……………」

そう言って再び倒れたのであった。

「9……………10！ 勝者、浦飯幽助え〜〜〜！！！」

「おっしやあ！」

模擬戦第十一試合…必殺技・霊光弾で、一護を場外負けにした幽助の勝利。

第三十三話：似たもの同士（後書き）

次回、マフィアVS極道

第三十四話：マフィアVS極道（前書き）

遂に最後の模擬戦となりました。

第三十四話：マフィアVS極道

第十二試合：夜空のフィールドでは、ツナとリクオが立っていた。

「行くぞリクオ、覚悟は良いな？」

「お願いします」

死ぬ気丸でハイパーモード化したツナと刀を構えたリクオが遂にぶつかった。

「ハアッ！」

最初に攻撃を仕掛けたのはツナ。

拳を放ち、リクオはそれを刃で受け止めた。

「ハアッ！」

反撃をするリクオ。

無論、ツナはそれをかわす。

「（速い……とても同じ歳には見えない！ 山本と同じくらいの剣術だ）」

そう思いながらも、ツナは拳を構える。

リクオも刀を構えながら、慎重になる。

「コイツはとても面白くなってきたな」

そう言つて真之介は、モニターを覗いていた。

「リクオ氏とボンゴレは、どっちが勝つのかな？」

大人ランボがそう言つと、獄寺がこう言った。

「アホ牛、十代目に決まってるんだろ！ あんなガキ、一撃で倒せるつて！」

「いいえ！ リクオ様が勝ちますわ！！」

すると氷麗^{Carla}が反論した。

「十代目だ！」

「若です！」

側近同士のいがみ合いを見ながら、呆然とするボンゴレメンバーと奴良組メンバー。

互いに構えながら、慎重になっている二人。

「成程、中々ですね」

「お前もな」

二人はそう言つて、互いに相手の実力を認め合う。

「その姿が、綱吉さんのもう一つの姿って考えても良いんですよ
？」

「ああ……それが何だ？」

ツナが質問をした、次の瞬間であつた。

「だから、見せてやるよ。俺のもう一つの姿を………」

「!?!?」

その瞬間、ツナはリクオの変化に驚きを隠せなかった。

一瞬にしてリクオは、長い白髪に鋭い赤い眼を持った17歳くらいの青年に変化した。

「その……………姿は!？」

「俺のジジイが、“ぬらりひょん”っていう妖怪でな。俺はその血を4分の1受け継いでいるんだ……………言わば混血^{クォーター}ってヤツだ」

驚くツナに、リクオは自分の事を少し説明した。

「マフィアと極道……………こんな面白い喧嘩、そう出来っこないぜ?」

楽しそうに笑うリクオにツナは冷静さを失いかけた。

「(く……………さっきまでの彼とは大違いの雰囲気だ。とても目を合わせられない)」

「何、つつ立てるんだ?」

「!？」

リクオは一瞬でツナの前に現れ、回し蹴りを脇腹に叩き込んだ。

「ゲアッ!」

蹴り飛ばされたツナは、すぐさま立ち上がり、リクオに突進する。

「うおおおおお！」

拳を叩き込むが、すぐさま攻撃を防がれてしまう。

「クッ！」

「どうした、そんなもんか？」

余裕の笑みを浮かべたリクオと、冷静さを失ってしまったツナ。

「よう、勝負の方は？」

控え室では、幽助と一護と閃可が戻ってきた。

「あ、黒崎君」

「ツナの試合は？」

「それが……」

一護に問われた織姫がモニターに顔を向けると、一護は信じられないものを目にしていた。

「な……………何だよアレ！？ アイツ誰だよ！？ ツナの相手は、リクオじゃなかったのか！？」

驚きを隠せない一護であったが、真之介がすぐに答えた。

「アレはリクオだ。 アイツは妖怪である爺さんの血を、4分の1受け継いでるんだ。 ただ、夜にしか変化出来ないという弱点があるがな」

それを聞いた一護は、驚愕してしまう。

「じゃあ……………アレはリクオなのか！？」

「そうだ」

「クッ！」

蹴られた脇腹を押さえながら立ち上がるツナであったが、リクオはすぐさまこう言った。

「何をビビッてるんだお前は？」

「何だと？」

「ツナ、お前の目には『恐怖』しか写ってねえ……そんなんじゃ、すぐに戦いで死ぬぜ」

「!！」

リクオの言葉に反論できないツナ。

「避ける時は“斬られるのが怖い”、誰かを護る時は“死なせるのが怖い”、攻撃する時は“殴るのが怖い”……そんなんじゃお前の拳は俺には届かなねえぞ」

そう言っつてリクオは、剣を向けながら指摘する。

「良いか？戦いに必要なのは『覚悟で、』『恐怖』は必要ない。寧ろ、『恐怖』からは何も生まれねえぞ。避ける時は“斬らせない”、誰かを護る時は“死なせない”、攻撃する時は“殴る”……俺の剣にも見えるだろ？ オメエを“斬る”っていう『覚悟』が」

それを聞いた瞬間、ツナは一瞬でリクオの懐に入り、彼の右頬を殴った。

「グッ！」

殴られたリクオは、すぐに体勢を直しながらこう言った。

「良い目だぜツナ……ソレが『覚悟』だ。今の一撃を忘れるなよ」

そう言っつてリクオは刀を構え、ツナは拳を構えたのであった。

「互いにちゃんとした自己紹介がまだつたな、リクオ」

「そうだな、ツナ」

「ボンゴレファミリー十代目ボス・沢田綱吉。全力で行かせて貰う！！」

「関東妖怪任侠一家『奴良組』三代目総大将・奴良リクオ。いざ、尋常に参る！！」

互いの自己紹介を終えた大空の守護者と魑魅魍魎の主は、互いの全力を出そうとしていた。

「ツナのヤツ、リクオの説教を食らった瞬間に変わりやがった!？」

一護が驚くとリボーンがこう言った。

「恐らくリクオの言葉で、戦う覚悟を決めたんだろう。 奴良リクオ、大した男だぜ」

そう言っつてリボーンは、リクオに敬意を表した。

「うっしやー、面白くなつてきやがったぜ! 頑張つて下さい十代目ええええええええ!」

「若も頑張つて下さああああああい!」

仲間達が見守る中、二人は拳と刃をぶつけ合ったのであった。

『『ウオオオオオオオオオオオオオオ!』』

果たして、戦いの行方は……

第三十四話：マフィアVS極道（後書き）

次回、鬼纏姫の能力

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9297t/>

次元の破壊者～繋がる世界の絆～

2011年12月2日01時48分発行